

PHILIPY'09

第10回「国際参加プロジェクト(フィリピン)」報告書

Report of the 10th

"International participation project"

in the philippines



天理大学

地域文化研究センター (ICRS)

International Center for Regional Studies

Tenri University

冊子名『Philipy』とは、“Philippines”と「博愛、人類愛」を意味する“Philanthropy”を組み合わせた、「フィリピン大好き」を意味する造語です。

サンタローサ市位置



目次

はじめに	4
参加者名簿	5
活動スケジュール	6
募集要項	8

報告書刊行に寄せて 9

天理大学学長	橋本 武人	10
天理大学地域文化研究センター長	住原 則也	11
天理大学後援会長	諸井 英二	12
天理大学国際文化学部長	松尾 勇	13
天理大学人間学部長	神田 秀雄	14
天理教東本大教会サンタローサ出張所長	上田 和興	15
天理中学校教諭	米田 道治	16
総合地球環境学研究所研究員	辻 貴志	17
天理大学言語教育研究センター講師	吉田 智佳・小林 早百合	18
天理教道友社『天理時報』記者	石倉 勤	19
天理大学地域文化研究センター共同研究員	椋野 和子	21
天理高校介護福祉科看護師		

第1部 参加者感想 22

天理大学「国際参加プロジェクト」のエッセンス		
～天理スピリットの継承を願って～ 澤山 利広	23	
ダラワン・ベセスナ・アコン・ドウマティン・サ・ピリピーナス!!		
大好きなフィリピンへ	椋野 まゆみ	25
I hope・・・	椋野 美和	26
フィリピンというステージで!	奥 きよか	28
Hanggang sa muli(また会う日まで)!	安田 美貴子	29
フィリピンでの活動を終えて	久保 真百子	31
きっかけを与えてくれた旅	岡島 美佳子	33
初めてのフィリピン	北嶋 美根子	35
たくさんの出会い	貝増 舞	37
	柳川 賀津子	39

第2部 English Message 40

Message from our host families 41

第3部 活動記録 43

事前研修 44

現地滞在日誌 47

リコーダー指導 59

学校班レポート 63

交流班レポート 66

相撲班レポート 68

第4部 資料 73

フィリピン共和国概要 74

発表会式次第 75

英文指導書 76

英文リーダースピーチ 77

よく使ったタガログ語集 79

活動資料 80

天理教の用語説明 84

新聞記事、寄贈物品一覧 85

お礼状 87

編集後記 88

はじめに

天理大学地域文化研究センター主催の第10回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」は、2009年2月21日～3月4日の12日間の日程で実施されました。前半はフィリピン共和国サンタローサ市を拠点に活動を行い、後半の2日間は首都マニラに場を移しました。

本プロジェクトは主に、サンタローサ市内のシナルハン小学校において4年生にリコーダーの指導を行うものでした。また、子ども達と折り紙や絵を通しての文化交流、高校生とのスポーツにも汗を流しました。国際交流基金マニラ日本文化センターでは、フィリピン人日本語講師の方々を対象としたリコーダー教授法のワークショップを開催しました。

この報告書は本プロジェクトの準備、現地活動、帰国後の活動の足跡を記したものです。この活動を我々だけの思い出に残すだけでなく、これから先の活動に繋げていければとの思いを思いを込めて作成しました。お手にとってご覧になっていただければ、大変嬉しく思います。

第10回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」参加者一同



第10回「国際参加プロジェクト(フィリピン)」参加者名簿

所属は実施期間 (2009年2月21日～3月4日) 現在

■引率者

1. 住原 則也 地域文化研究センター長、国際文化学部教授
2. 澤山 利広 地域文化研究センター専任研究員、国際文化学部准教授

■一般

1. 奥 きよか 天理教笠岡大教会よふぼく
2. 椋野 まゆみ 天理教敷島大教会よふぼく
3. 椋野 美和 天理教敷島大教会よふぼく、神戸大学3年

■天理大学生

1. 安田 美貴子 国際文化学部アジア学科中国語コース4年(リーダー)
2. 久保 真百子 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース4年(サブリーダー)
3. 岡島 美佳子 人間学部人間関係学科社会福祉専攻4年
4. 北嶋 美根子 人間学部人間関係学科宗教学専攻4年
5. 貝増 舞 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科ドイツ語コース1年
6. 柳川 賀津子 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科ドイツ語コース1年

参加者総数11名 (男：2、女：9)

～現地活動スケジュール～

天理大学地域文化研究センター (ICRS)

第10回「国際参加プロジェクト(フィリピン)」日程

日時	内容	日時	内容
2/21(土)	6:15 天理大学前集合→天理駅経由→ 8:00 関西国際空港 Dカウンター前集合 9:55 関西空港発 (PR407) 13:35 マニラ国際空港着(センレニアル2) 16:00 →サンタローサ 18:00 夕勤、オリエンテーション 19:00 HF との顔合わせ→各自ホームステイ先へ	2/27(金)	朝勤(朝食はHF) 7:00 シナルハン小学校 8:00 リコーダー指導 12:00 昼食(小学校) 15:00 発表会 夕勤→各自ホームステイ先へ(夕食はHF)
2/22(日)	朝勤(朝食はHF) 8:30 月次祭準備、ミリエンダ準備 11:00 月次祭 12:30 ミリエンダ 15:00 ミーティング or 活動準備 18:00 夕勤→各自ホームステイ先へ(夕食はHF)	2/28(土)	朝勤(朝食はHF) 9:00 私立サンタローサ高校にてスポーツ交流 12:00 昼食 12:30 さよならパーティ買出し準備 15:00 HF からミリエンダの招待 18:00 夕勤→各自ホームステイ先へ
2/23(月)	朝勤(朝食はHF) 8:30 シティツアー 11:30 昼食(Jolly Bee) 13:00 市長表敬訪問 14:00 ホスピタル訪問(紙芝居、折り紙) 18:00 夕勤→各自ホームステイ先へ(夕食はHF)	3/01(日)	朝勤(朝食はHF) 9:00 (HF さよならパーティ準備) 12:00 さよならパーティ(~15:00) 18:00 夕勤→各自ホームステイ先へ(夕食はHF)
2/24(火)	朝勤(朝食はHF) 7:30 シナルハン小学校 8:00 リコーダー指導 11:30 昼食(小学校) 13:00 ミーティング or 活動準備 14:00 文化クラス(小1:342名) 18:00 夕勤→各自ホームステイ先へ(夕食はHF)	3/02(月)	朝勤(朝食はHF) 7:30 サンタローサ(バスで移動)→マニラ 9:00 天理教フィリピン出張所表敬訪問 12:00 チェックイン (Hotel Celeste) 13:00 昼食 Free time ショッピング 18:30 夕食
2/25(水)	朝勤(朝食はHF) 7:30 シナルハン小学校 8:00 リコーダー指導 11:30 昼食(小学校) 13:00 文化クラス(小2:250名) 18:00 夕勤→各自ホームステイ先へ(夕食はHF)	3/03(火)	ホテルロビー集合(朝食は各自) 9:00 フィリピン大学生との交流準備 13:00 ひな祭り杯フィリピン相撲場所(フィリピン大学) ミリエンダ 16:00 国際交流基金表敬、リコーダー教授法指導 19:00 夕食
2/26(木)	朝勤(朝食はHF) 7:30 シナルハン小学校 8:00 リコーダー指導 11:30 昼食(小学校) 13:00 文化クラス(小3:250名) 18:00 夕勤→各自ホームステイ先へ(夕食はHF)	3/04(水)	10:00 マニラ発 12:00 昼食 14:00 解散式(マニラ国際空港内) 14:20 マニラ国際空港発 (PR422) 19:20 関西国際空港着

Sinalhan Elementary School (SES) in City of Sta. Rosa, Laguna.

Schedule

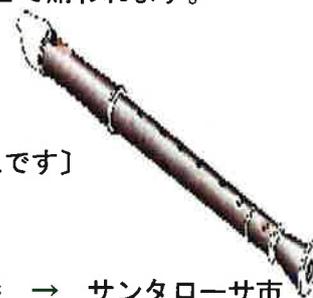
Date – Time	Team A (5 Japanese Female Volunteers)	TeamB(4Japanese Female Volunteers)
Feb 24 (Tue.)		
08:00 – 09:00	Grade 4 Section 1 (49pupils) in Music Class	Grade 4 Section 3 (56 pupils) in Music Class
09:15 – 10:15	Grade 4 Section 2 (51pupils) in Music Class	Grade 4 Section 4 (55pupils) in Music Class
10:15 – 12:00	Meeting & Preparation for Tomorrow's Class	
12:00 – 13:00	LUNCH at SES	
13:00 – 15:00	Grade 1 Section1–7(350 pupils) in Art Class	
Feb 25 (Wed.)		
08:00 – 09:00	Grade 4 Section 1 (49 pupils) in Music Class	Grade 4 Section 3 (56 pupils) in Music Class
09:15 – 10:15	Grade 4 Section 2 (51pupils) in Music Class	Grade 4 Section 4 (55pupils) in Music Class
10:15 – 12:00	Meeting & Preparation for Tomorrow's Class	
12:00 – 13:00	LUNCH at SES	
13:00 – 15:00	Grade 2 Section1–5(250 pupils) in Art Class	
Feb 26 (Thu.)		
08:00 – 09:00	Grade 4 Section 1 (49 pupils) in Music Class	Grade 4 Section 3 (56 pupils) in Music Class
09:15 – 10:15	Grade 4 Section 2 (51pupils) in Music Class	Grade 4 Section 4 (55 pupils) in Music Class
10:15 – 12:00	Meeting & Preparation for Tomorrow's Class	
12:00 – 13:00	LUNCH at SES	
13:00 – 15:00	Grade 3 Section1–5(250 pupils) in Art Class	
Feb 27 (Fri.)		
08:00 – 09:00	Grade 4 Section 1 (49 pupils) in Music Class	Grade 4 Section 3 (56 pupils) in Music Class
09:15 – 10:15	Grade 4 Section 2 (51 pupils) in Music Class	Grade 4 Section 4 (55 pupils) in Music Class
10:15 – 12:00	Meeting & Preparation for Tomorrow's Class	
12:00 – 13:00	LUNCH at SES	
13:00 – 15:00	Meeting & Preparation for Mini Concert Mini Concert at SES	
Mar 01 (Sun)		
09:00– 12:00	Preparation for Farewell Lunch or Mirienda	
12:00 - 15:00	Farewell Lunch or Mirienda with SES Teachers and Host Families at Tenrikyo Sta. Rosa Mission Station	

天理大学地域文化研究センター (ICRS) 第10回「国際参加プロジェクト (フィリピン)」 募集要項 (天理大学学生・院生用)

本プロジェクトは、「教学協働」と「社会学連携」を志向し、フィリピンでのボランティア活動とホームステイなどを通じて、国際協力のあり方を考え、帰国後の諸活動の契機とすることを目的としています。

1. 場所： フィリピン共和国ルソン島ラグーナ州サンタローサ市およびマニラ首都圏
2. 期間： 2009年2月21日(土)～3月4日(水) [1泊12日]
3. 参加費： 10万円(航空券代金、宿泊費、食費(一部を除く)、フィリピン国内移動費などを含む)
※ その他の費用については、天理大学後援会からの参加補助金などで賄われます。
4. 募集人員： 20名程度(最低催行人員4名)
5. 募集資格： 天理大学学生・院生 [全学部生・大学院生が対象です]
6. スケジュール(予定)：

2月21日(土)	関西国際空港集合 → マニラ国際空港 → サンタローサ市
22日(日)	小学校でのリコーダー指導
	↓
3月01日(日)	ボランティア活動、ひのきしん、ホームステイなど
02日(月)	サンタローサ市 → マニラ首都圏(フィリピン大学での交流)
03日(火)	世界遺産訪問など
04日(水)	マニラ国際空港(解散) → 関西国際空港
7. 申し込み： 10月27日(月)午後5時必着で「申込書」をICRSに持参(FAXあるいは郵送も可)して下さい。
申込書の内容をメールで送信いただいても結構です(必要項目が含まれていれば、書式は問いません)。
8. 参加者の決定： 申込書の内容と面接 [11月10日(月)あるいは11日(火)午後4時半～8時半の10分程度] で選抜します。結果は原則 e-mail で通知します。



報告書刊行に寄せて

天理大学学長	橋本 武人 10
天理大学地域文化研究センター長	住原 則也 11
天理大学後援会長	諸井 英二 12
天理大学国際文化学部長	松尾 勇 13
天理大学人間学部長	神田 秀雄 14
天理教東本大教会サンタローサ出張所長	上田 和興 15
天理中学校教諭	米田 道治 16
総合地球環境学研究所研究員	辻 貴志 17
天理大学言語教育研究センター 講師	吉田 智佳 18
	小林 小百合
天理教道友社編集出版課『天理時報』記者	石倉 勤 19
天理大学地域文化研究センター共同研究員	椋野 和子 21
天理高等学校介護福祉科看護師	

第 10 回「国際参加プロジェクト」報告書刊行に寄せて

学長 橋本 武人

天理大学の「国際参加プロジェクト」は、建学の精神に基づく行動指針として唱道する「他者への献身」を国際的なスケールで実践し、よって本学の教育目標として掲げる宗教性と国際性を同時に涵養する教育課程である。

本プロジェクトは、2001 年に大震災に見舞われたインド西部地区への災害救援活動として始められた。いわゆる義援金や救援物資を運び届ける類いの活動ではなく、最初のインドでは貯水のための河川堰建設やボンガ（土嚢ハウス）の建築など、現地の人々が自立復興へ向けて必要とするものを、ともに汗して建設するところに特色をもたせたもので、この基本姿勢はそれ以降のプロジェクトにおいても一貫している。

2008 年度の活動は、ここ数年続けられているインドネシアとフィリピンで展開され、インドネシアを第 9 回、フィリピンを第 10 回と数えている。本書は、サンタローサ市のシナルハン小学校の 4 年生児童 250 名に対するリコーダーの演奏指導を中心に、1 年生 (350 名)・2 年生 (250 名)と 3 年生 (250 名)の児童に対する文化クラスを開催し、フィリピン大学において大学生との文化交流を行った第 10 回「国際参加プロジェクト (フィリピン)」の活動報告書である。

このたびのフィリピンでのプロジェクトで特筆すべきは、全国各地から 243 本のソプラノ・リコーダーが寄贈されたことである。これは過去 3 回にわたるフィリピンでの活動の実績が知られるようになり、多くの方々の善意が寄せられるようになったからである。また、国際文化学部と高大連携の関係にある二階堂高校の生徒諸君から手作りの英語紙芝居が寄贈され、法隆寺国際高校の諸君から預かった手縫いの布絵本なども現地に持参し、それらはすべて文化クラスやその他の機会に活用された。

限られた期間とはいえ、言葉も違えば習慣も異なる異文化圏の人々との共同作業、ホームステイ先の家族との直接的な交わりを通して、参加者たちは国際性を培う上で多くのことを学び、現地の人々に喜んでいただく他者への献身を通して、人をたすける心、宗教的な心性の涵養も可能になる。また、貧しくとも純真で屈託のない子供たちとの交わりは、何かにつけて恵まれている自己自身を省みる機会となり、物質文明が置き去りにしてきた心の豊かさを取り戻す契機ともなる。

今はまだ渡航先も限られ、参加人員数にも制限があるが、おいおい活動の範囲を世界の各地に広げて、一人でも多くの学生諸君が参加できるようにしていきたい。終わりに、この度のプロジェクトの計画実施に携わった教職員、絶大なご支援ご協力を賜った関係機関各位のご厚情に対して、深甚なる敬意と謝意を表します。

「くノ一部隊」大活躍

地域文化研究センター長 住原 則也

「暗闇をなげくより、自分の持っているロウソクに火を灯すことを考えなさい」という諺が中国には古くからあると聞きます。この世は問題が山積しどこから手をつけていいかわからないほど見通しがつかない、まさに暗闇同然と思われるときですら、それを嘆き無気力に陥るのではなく、各自が自分のごく身近なところから何か些細なことでもアクションを起こすことの大切さや意義を語る諺と解釈できます。今回10回目となる「国際参加プロジェクト」もそのような小さな灯火（ともしび）であるかもしれません。2週間足らずの活動で、途上国のかかえる問題をわずかでも解決できるというものではありません。しかし、学生にもできる活動を行うことで、学生と現地の子どもたちや住民の間には確実に小さいながらも希望の灯火のような光が放たれています。私自身引率スタッフとして今回で5回目の参加となっていますが、回を重ねる度にそのような感を深くしてきました。

今回のフィリピンでのプロジェクトもまた、多くの人に知っていただきたいような充実した内容となりました。首都マニラから南方のサンタローサ市のシナルハン小学校とその周辺で、参加学生と、ようぼくの社会人計9名は、間違いなくそれぞれの灯火を毎日精一杯放っていました。今回の参加者は全員が女性という、これまでにない人員構成でしたが、男子のいないハンディなど全く見受けられません。私は勝手に、今回の参加者チームを、「くノ一部隊」と呼んでいました。「九人で一手一つ」という意味も含めてのことです。「九人十脚」のチームワークと呼んでいいかもしれません。小学校などでの活動の場では全員で力をあわせ、また一人ひとり別々の家庭でホームステイし、慣れない外国語であっても積極的にホストファミリーとコミュニケーションを取っていたように感じられました。朝は天理教東本大教会サンタローサ出張所のお社の前で一緒に朝づとめをしてから一日の活動が始まり、夕方にも出張所で夕づとめをしてからそれぞれホームステイ先に帰ってゆくという生活のリズムをつくっていました。忙しいスケジュールでありながら、誰一人脱落者もなく、予定されていたすべての活動に満足ゆく成果を得ることができました。この報告書はその記録ではあっても、全貌の一部しかお伝えできないのが残念です。

現地の生活空間は、貧富の格差、衛生、食生活など、この「国際参加プロジェクト」などの活動ではどうしようもないほど多くの問題をはらんでおり、活動が無事やり終えたといっても誰一人自己満足にひたっているわけではありません。むしろこの活動をきっかけとして、引率者も含め全員、今後どのように自分のロウソクに火を灯せばよいのか自然に考えるようになっているものと思われます。

末尾になりましたが、後援会、東本大教会出張所の皆さまはじめ、ひとかたならぬお世話になったすべての方々に、心よりお礼申し上げます。

これからも「国際参加プロジェクト」

後援会長 諸井 英二

地域文化センター長の住原氏は、「国際参加プロジェクト」について『フィリピン・プロジェクト 06』報告書で「本学の伝統である他者への献身と言い換えることのできる宗教性と、もう一つは語学を身につけ海外に雄飛する国際性の双方を併せ持ち、本学の伝統的精神の延長線上に位置するもの」と評価しておられます。言うまでもなく後援会の主たる役割は本学建学の精神たる「陽気ぐらし社会建設のための人材養成」を側面からサポートすることであり、後援会としても本プロジェクトを高く評価し、後援してきたところです。

ところが、海外情勢の関係から平成 19 年度会計決算において「国際参加プロジェクト」関係の予算は十分に執行されたとはいえませんでした。そこで、平成 20 年度予算においては予算を減らして、関係者に事業実行に対する奮起をうながしました。そうした中、年度途中ではありましたがフィリピンでのプロジェクト復活のための予算要求があり、私たちもほっと胸をなでおろし、今、その成果を期待しているところです。

前出の住原氏によれば、このプロジェクトは現地へ出向く 2 週間の活動だけを指すのではなく、長きにわたる事前の研修と帰国後の記録のまとめという一連の全工程を指しているそうです。その中には現地での急な活動内容の補正や、帰ってからの活動記録文集の整理、報告会の開催や次年度予算要求等までもが含まれるのでしょう。まさに事業の立案から執行、評価にいたる過程をプロジェクトにかかわるすべての人材が一手一つになってこそ成し遂げ得るものなのでしょう。参加された学生さんはこのような貴重な体験を通じて陽気ぐらし社会建設の人材となり社会に羽ばたかれるものと思います。

残念なことに、「国際参加プロジェクト」については 2009 年度のプロジェクト予算要求がなされませんでした。諸般の事情によるものと推察いたしますが、歴史を刻み込みつつここまで来た事業です。私たちは皆さんが諸先輩方とともに刻んでこられた歴史の重みを評価しています。

今回、私たちは「国際参加プロジェクト」の予算項目だけはこれまで通り残すことにしました。この事業にかかわってこられた皆様には、諸般の事情を乗り越え、これからも「国際参加プロジェクト」を行う努力を続けていただきますようエールを送り、報告書に寄せる言葉とします。

第10回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」報告書刊行に寄せて

— 歴史を常に胸に刻んで —

国際文化学部長 松尾 勇

2001年から始まった本学の「国際参加プロジェクト」は、今回で10回を数えることとなりました。これまで参加された多くの方々の熱意と真心が支えてきた成果だと言えます。今回は卒業を目前に控えて、今まさに社会に飛び立とうとする4年次生の学生の皆さんが中心になってプロジェクトを実施されたことを聞いて、天理大学で学んだことを実践しようとするその熱い思いに敬意を表するとともに、後輩学生に立派な模範を示してくださったことに感謝申し上げたい気持ちでいっぱいです。今や自宅の居間にいても世界中の情勢がいたもたやすく情報として入手できる時代です。しかしながら、実際に現地に赴いて生活するとなると当然のことながら予測できないさまざまな困難が待ち受けています。12日間にわたってフィリピンの方々と生活をともにしたことは参加した皆さんにとって今後大きな財産になることと思います。

天理教の海外布教師養成を目的として創立された天理外国語学校を前身とする本学では、その精神を受けて時代が変わっても常に「宗教性」と「国際性」を教育の根幹にしてきました。真心のこもった言葉でひとりひとりに接することの大切さは、時とところを超えて不変です。今回のプロジェクトにおいてもそのことを実感されたことと思います。人が生きる勇気を与えるのは真心の触れあいを胸に感じたときです。そして人は生きる喜びを得ます。

「道は近きより遠きへ」、このことを背景に本学は日本に近いアジアの諸言語を教え学ぶ長い伝統を持っています。今後も「国際参加プロジェクト」をさらに充実させる意味においても、私たちはアジア諸国と日本の関係を近現代史において常にしっかり学んでおく必要があります。第2次世界大戦のおり、フィリピンをめぐる日米の対立がフィリピンの人たちに癒えることのない大きく深い傷を与えたことは、必ずしも多くの人たちが知っている史実ではないと思います。私自身、今回原稿を依頼されてあらためて、かつてNHKで放送された『その時歴史が動いた～引き裂かれた村 日米戦の舞台・フィリピン民衆の苦悩～』を見ました。歴史を学ぶのは明日をより良く生きるためです。

参加された4年次生の皆さんが今後ますます実社会において活躍されますことを祈っております。また、1年次生の皆さんはしっかり学び自らよく考えて学生生活を送られますようお願いいたします。おわりに、今回のプロジェクトが成功するように支えてくださったすべての方々に感謝申し上げます。

第10回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」報告書刊行に寄せて

人間学部長 神田 秀雄

今年度も12日間にわたり、人間学部からの2名と国際文化学部からの4名の計6名、さらに3名のよふぼくの方々が参加して、第10回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」が実施されたことは、まことによるこぼしいことです。サンタローサでのリコーダー指導も、5日間にわたる練習の後に発表会が行われ、先輩たちが切り開いた小学生との交流がしっかり受け継がれているようです。また、マニラでのフィリピン大学生との交流行事にも、これまでの交流経験が活かされると同時に、「ひな祭り杯フィリピン相撲場所」の開催など、新たな工夫も凝らされたことがうかがえます。今回の参加学生は、6名のうち4名までが4年次生ということですが、卒業を前にして、東南アジアの人々との交流を持ったことは、これから社会に出てゆくうえで、きわめて貴重な経験になったことでしょう。

ところで、私が学生だった今から30数年前は、ようやく海外旅行が自由化された時代でした。「高度成長時代」の終わり頃で、ヨーロッパやアメリカへの旅行が高い人気を集めていました。そしてそのことは、当時の日本社会が、明治維新から約1世紀を経ても、欧米を模範とする近代化という発想からまだ到底脱却できていなかったことをよく表しています。

『天皇の逝く国で』や『祖母の国』の著者であり、アメリカ人の軍人と日本人の母との間に生まれたシカゴ大学のノーマ・フィールド教授は、8年ほど前、同じくアメリカ人で沖縄出身の大学院生島袋マリアさんとの対談NHK教育テレビ『シリーズ・日本人の肖像』、の中で、およそ次のように指摘しました。「日本人は、かつては「お国のため」に尽くすことに縛られていたが、「高度成長時代」には、今度は「会社のため」に働くことがそれぞれの目標になってしまい、外側から近代日本の歩みを考え直すいとまがなかった、そして1990年代に東アジアや東南アジアの国々から「戦争責任」を問われたことをきっかけに、いま、ようやく国という枠を超えた視点を持つことを迫られている。」と。

本学は、「陽気ぐらし世界」の建設を建学の精神に掲げ、国の内外での「他者への献身」を推奨している大学です。その天理大学に学び、卒業していく学生諸君には、ノーマ・フィールド教授が指摘する現代日本の状況を、積極的に切り開いてほしいと思います。そして、その意味から、天理大学のいちスタッフとして、私も、「国際参加プロジェクト」を通じた交流を受け継いでゆくことに微力を尽くしたいと思っています。

お礼に代えて

天理教東本大教会サンタローサ出張所長 上田 和興

「他者への献身」という大学の方針の中でのプロジェクトとして、当出張所を数回に亘りお使い頂き、望外の喜びです。

今回は女性ばかりのプロジェクトになりましたが、私は女性の持つ母性の素晴らしさを再認識させていただきました。

例えば、近所の見知らぬ子供たちが毎朝、出張所にやってくるのであります。こんな事は、かつてなかったことです。小学校での雰囲気も女性の暖かさ、抱擁力で大変楽しそうでした。

お陰で、私たちが毎日おたすけに廻る貧しい地区の人々だけでなく、市役所、 balan g ai ・ホール（町内事務所のようなもの）の人々ともお付き合いが出来て、昨年11月には10名のサンタローサの方々が東本大教会創立110周年、五代会長就任奉告祭、そして天理において下さいました。

天理教では、「心通りの守護」という言葉があります。参加者の方々が数ヶ月の準備をされ、現地で約2週間活動されるわけですが、その裏に住原先生や澤山先生、棕野先生の長い伏せ込みもあり、そのようなものが形を変えて「他者の献身」の果実をもたらしてくれているように思います。

地球上の貧富の差や、政治の問題や国家間、民族間での紛争、それからくる飢餓に対する私たち一人一人の何とかしようという思いと行動が、大きな力となり世界に影響を与えることになるでしょう。学生時代に培われた精神が、お一人お一人の心の中で成長してその一億人の一人になれば、どんなに良い人生となるか知れません。人間は、一人で生きてゆけませんので、自分が勝手に動くことはできませんが、精神は大いに子々孫々に受け継がれてゆくことを信じています。一人から数十人、数百人に広がってゆきます。

我がサンタローサ出張所は、ご覧の通りの小さな存在ですが、夢や企画は大きなものを持ち続けています。その時は又、お役に立てれば幸いです。

皆様、有難うございました。

リコーダーとの出会い

天理中学校教諭 米田 道治

(リコーダー教授法指導講師)

みなさんの場合、ソプラノ・リコーダーは小学校で初めて手にされたはずです。

私の時代、小学校ではハーモニカを吹かされ、中学校に入学して初めてソプラノ・リコーダーを持ちました。私自身は小学校4年生の時に、東京の従兄弟と初めて出会った際、彼から初めて「リコーダー」なるものを教えてもらいました。さすが東京は違うなあ、都会だなあ…と感心しながら、真似をしてピーピー音を出していました。もともと音楽が好きだったからか、その後も時々、我流で吹いていた記憶があります。そういう初めての体験が良かったのか、中学校に入学して初めてリコーダーを吹いた時、みんなよりも早くから吹いていたために上手に吹けました。まわりや先生が褒めてくれるから練習する、また上達して吹くと褒めてくれる… そのくり返しでハマってしまったのかもしれませんが。いまだに音楽から足が洗えません(笑)「好きこそ、もの上手なれ」と言いますが、その通りの経験でした。

今回、講座を担当させていただいたのは4度目になります。毎回、強く印象に残っていることは、学生のみなさんの真剣な姿です。「目的」を持つこと、そして同じ「目的」を共有する仲間がいることの素晴らしさを痛感させられます。今回は以前と比べると人数も少なく、みなさん優秀な方ばかりで、用意していた教材がどんどん進んでしまっ、やる事がなくなってしまうこともありました。実際に現場で教えてみてどうでしたか?リコーダーに初めて触れた子供たちの嬉しそうな表情を想像することはできますが、みなさんは直接それを見て、どうだったでしょうか?これってとっても貴重な経験だと思います。音楽の喜びは自分で演奏することも喜びです。しかし、自分たちの演奏を聴いてくれる人が喜んでくれる姿を見ると、もっと大きな喜びが得られます。更に、自分たちが一生懸命に教えた子供たちが演奏してくれる姿、それはもっともっと大きな喜びだったと思います。

「感動は人の心をきれいにしてくれる…」私はそう考えています。みなさんもぜひぶんきれいに…

わずかな時間ではありましたが、みなさんと同じ時間を過ごすことが、できて本当に楽しかったです。私は君たちに大切なことを教えてもらうことができました。ありがとうございます! 本当にありがとうございます!

いずれ機会ができれば、私自身も一緒に出かけてみたいなあと思っているこのごろです。

第10回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」報告書刊行に寄せて

総合地球環境学研究所研究員 辻 貴志
(タガログ語講師)

「皆さんのフィリピンに対するイメージを聞かせてください」

昨年度につづき、今年も「国際参加プロジェクト（フィリピン）」の派遣前研修でタガログ語会話を指導する大役をつとめさせていただくこととなったが、講義のはじめに、私は冒頭のような質問を参加者にぶつけてみた。

このような質問をしたのには、これからフィリピンという国やその人びとと関係を築こうと意気盛んな、とりわけ20歳前後の若い人たちが、どのようにそれらについて理解しているか、あるいはどのように関わっていこうとしているのだろうか知りたかったからである。

「貧富差」「熱帯」「看護師」「バナナ」「やさしい人たち」などのキーワードに集約される回答が得られた。どれも尤もだし、フィリピンという国や人々の特徴や問題点について、少なからず大学の講義や本、ニュースなどで知識を身につけていることがうかがえた。

少々いじわるかも知れないが、私が期待した「かわいそうな人たち」あるいはそれに類する回答はみられなかった。むしろ、さまざまな問題を抱えつつも、あるいはそうだからこそ助け合ってあかるく生きる人々がいて、彼らと対等な目線で交流することでフィリピンという国や人々について学んでいこうとする真摯で前向きな姿勢に驚かされた。

人はイメージに左右され、現実のなかで生きている。イメージは現実を創造し、現実にはイメージを増長し、往往にして人の視野を曇らせたり偏狭にすることがある。たとえば、ある県のプールや銭湯で性病が蔓延するとしてフィリピン人女性を締め出す事件が実際に起こった。それは一部の在日フィリピン人女性をエイズに感染した売春婦のように見ていたからである。一方、フィリピン人が一重まぶたの人を目にすれば、自分の両眼を指で横に伸ばして相手の細い目をことさら強調しようとするしぐさがテレビや巷で少なからず見受けられる（私事だが、わたしは辟易するほどフィリピン人によくこのしぐさをされる。最近、アメリカでは、このしぐさをした若手女性芸能人が、アジア人権団体から人種差別の咎で告発され、数十億円にもものぼる慰謝料を請求される事件に発展した）。

イメージ、そして現実には背景がある。そうした背景について公正な視点をもって理解し、問題点についてあらため、正していくことが、日本にいるだけではみえない実地での人々との交流のなかから学び考える「国際参加プロジェクト」に参加した皆さんにとってのこれからの役割であり責任であると信じる。私のタガログ語の教授能力は依然としてつたないもので、研修中みなさんには不明瞭な点などいろいろとご迷惑をかけたかとおもいますが、フィリピンでの「国際参加プロジェクト」を心底から楽しみ、責任をもってやりとげようとするみなさんの姿勢にささえられて、今年も無事任務を終えることができたことと充足感にひたっているしだいです。

『学内連携（「国際参加プロジェクト」と「まなび一た」）の始まりに寄せて』

言語教育研究センター講師 吉田 智佳・小林 早百合

「国際参加プロジェクト」と「まなび一た」。活動の場は異なっても、どちらも「ボランティア活動に支えられた活動であり、言葉や文化の背景が異なる者同士が関わりあうという点では同じです。これまではお互いの活動は知っていても、その活動を連携させるという機会はありませんでした。しかし、その「連携」が実現したのです。

まず、「まなび一た」の活動を少しご紹介します。「まなび一た」の基本理念は「母語、母文化の違いを超えて、共に学ぶ者同士がお互いに教えあい、学びあう」ということです。「まなび一た」では、授業とは異なり、学生同士が先生になり、生徒になり、教えあいながら、楽しくコミュニケーションをはかっています。また、1年に何回かお互いをよりよく知るためのイベントを行っています。自分の故郷（母国）にちなんだ食べ物を持ち寄って食べるポットラックランチパーティ、かるた大会、ゆかたの着付け、習字教室、関西弁セミナー、折り紙教室などを開催してきました。最初は「互いに交流を深め、言語・文化の違いを超えて相手を知ろう」というのが目的でした。それから、新たな一歩を踏み出したのです。

きっかけは「バザー」でした。品物は「まなび一た」のメンバー手作りのちりめんマグネットとフェルト素材の小物たち。日頃持ち慣れない針と糸で縫ったり、綿をつめたり、リボンを結んだり…。その作業をしながら、だんだんとメンバーの心は一つにまとまっていきました。「心を込めて作って、買っていた代金はすべてインドネシア、フィリピンのこどもたちのために使ってもらおう！」と。とはいえ、「まなび一た」のメンバーにできることは心を込めて作り、思いを伝えて、気持ち良く買っていただくこと。どんなに頑張ってもそこまでしかできません。そこからは「国際参加プロジェクト」に関わる方々にバトンタッチ！バザーにも協力を申し出てくださいました、地域文化研究センターの澤山先生、椋野先生、そのお金をドッジボールやリコーダーにかえて、インドネシアとフィリピンの子供たちに届けてくださった、住原先生、倉光先生、そして「国際参加プロジェクト」に参加された学生の皆さん、多くの方々のお力添えをいただいたおかげで「まなび一た」の思いは両国の子供たちに届けられました。

人間一人の力は微力です。しかし、思いを同じくする人たちが集まり、力を合わせたときにはとても大きな原動力になります。このことを、「国際参加プロジェクト」と「まなび一た」の連携で体験させていただきました。今回できた、この「手のつながり」が片方の手にも、そして、また別の手にもつながっていくことを期待しています。

「心」で受け入れる大切さ肌で感じ
～「国際参加プロジェクト」を取材して～

天理教道友社『天理時報』記者 石倉 勤

青空の下、そろいのピンク色のポロシャツを着た9人の美しい女子学生らが、吹き出す汗を拭いながら、フィリピンの子供たちにリコーダーを指導する――。いま、そんな光景を思い浮かべながら、報告文の執筆に当たっています。当然、同じポロシャツを着て。

天理大学地域文化研究センターが主導する第10回「国際参加プロジェクト」が2月21日から3月4日までの12日間、フィリピン・サンタローサ市を中心に実施されました。『天理時報』の記者である私は、2月26日に現地に入り、最終日の3月4日まで同行取材に当たりました。その様子を紹介した記事は「“国際支援のこころ” 学ぶ――フィリピンで文化交流体験」（3月22日号1面）との見出しで無事掲載することができました。紙面を通して、同プロジェクトの内容・成果はもとより、天理大学が標榜する「他者への献身」を国際的スケールで実践する熱き学生たちの姿の一端を、教内の多くの方々に知っていただけたのではないのでしょうか。

今回の取材の狙いは、掲載記事にも記した通り、「彼女たちは何を求めてプロジェクトに参加し、異国の地で何を学んだのか」を知ることでした。

プロジェクトには、教内外を問わず、これまでに延べ135人の学生が参加しています。そのOB・OGの中には、海外の総領事館の在外公館派遣員や海外布教に従事する者をはじめ、何らかの形で海外に関わる仕事に携わっている者が少なくありません。このことから、学生たちはプロジェクトを通じて、自らの進路をも決定づける特別な“異文化体験”をしていることが分かります。

「その体験が、どのようなものか知りたい!」。同行取材が決定してから急遽、澤山先生に無理をお願いしてホームステイ先を探してもらうなど、学生たちと同じ生活環境を整えていただき、少しでも彼女たちと思いを共有できるように努めました。

滞在中、熱心に活動する女子学生ら9人。一人ひとりの表情は実に輝いていました。そんな彼女たちに、私は「なぜ?」「どうして?」と質問し続けました。私たちは「嬉しさ」「楽しさ」「悲しさ」「悔しさ」などを感じたとき、その感情がいったい何から生じているものなのか自覚していないことが少なくありません。質問された学生たちは、心の中（または、潜在意識の中）で“記号”のような形で浮遊している感情の源を、一生懸命に言葉にしようとしてくれました。

私が心からうれしかったのは、投げかける質問を単に「取材」としてではなく、思慮すべき「自らの問題」として捉え、真剣に答えてくれたことです。「いま私は何をすべきなのだろう?」と。

取材を進めていくうちに、学生たちにさまざまな変化が見られるようになりました。ある些細な出来事をきっかけに「ホームステイ先の方々を初めて『家族』と感じた」「現地の食べ物が初めて“おいしい”と感じられた」「ある風景が昨日と違って、明るく見えた」、お道の学生であれば「一方的に教えを伝えるだけではだめ。まずは現地の人たちの宗教や考え方を理解しなければ」等々……。彼女たちは、こうした変化をきっかけに、自らが感

じたことを徐々に明確な言葉で表現してくれるようになったと思います。

結果、私が彼女たちの感じたことをどれだけ聞き出し、言語化（記事化）できたかは定かではありません。しかし、取材で感じた私なりのプロジェクトの神髄を言うならば、参加動機や夢や目標、現地での体験が異なっている、「異文化を『頭』で分かろうとするのではなく、『心』で受け入れる大切さを肌で感じる」とができるという点だと思います。これは、教室の中で学べることではないし、単に観光として現地へ赴くだけでは体験することはできません。リコーダー指導など現地の方々との交流の中で、言語や文化の障壁を乗り越えて、ともに喜びや悲しみを分かち合おうと一生懸命になること、さらには「喜んでもらいたい!」と「他者への献身」を実践すること——これらの経験を通じて初めて到達する境地ではないでしょうか。

このように、「国際参加プロジェクト」は、まさに「他者への献身」を国際的スケールで実践し、大学の教育目標である「宗教性」と「国際性」を学生たちに涵養するものだと、あらためて感じた次第です。そして、大学在学中に一人でも多くの学生に参加してもらいたいと強く思いました。

末筆ですが、引率の住原センター長や澤山先生をはじめ、サンタローサ出張所長の上田先生、現地教友の方々、美しき9人の天理大女子学生らプロジェクト関係者の皆さまには、取材に際し、多大なるご理解とご協力を頂き誠にありがとうございました。この場をお借りして、厚く御礼を申し上げます。

それにしても「ああ、記者としてではなく、学生時代にメンバーとして参加しておきたかったなあ」と後悔の念にかられる今日このごろです。

コラム① 《子どもたちがメンバーを呼ぶとき、アクセントは語尾!》

小学校に行ったときに、生徒たちが私たちの付けている名札を見てみんなの名前を呼んでくれます。「amami!」「kacchan!」「mayumi!」アクセントは全部語尾なのです。フィリピンの人はお互いの名前も語尾にアクセントを置くようです。これも、文化の違いなのでしょう。



ミスターサヤマア??

フィリピンの人にとって「澤山」先生の名前は発音しにくいようで、必ず一度は「ミスター・・・サヤマア?」と言い間違えていました。ちなみに、住原先生のお名前は、「s・・・」スミハラのスも出てこなかったようです

「国際参加プロジェクト(フィリピン)」謳歌

天理高校 椋野 和子

はじめて地域文化研究センターを訪れたのは2006年でした。2009年の今も時々研究棟の廊下を歩くことがあります。プロジェクトの一員を実感する時です。「フィリピン・プロジェクト 06」に参加したあと、'07年のフィリピン、'08年にはインドネシアでのプロジェクトに共同研究員として同行を許されました。

「国際参加プロジェクト(フィリピン)」では、その国の人々に接し、現実を見、知り、学び、異文化を体験しプログラムに沿って活動しました。それらのすべてに感動し、大袈裟ですが生きることの真意を問うきっかけとなり、今を感謝できることに繋がっています。生きる喜びを行動に表わすまでには大変なエネルギーが必要ですが、私にとってその一步を踏み出す勇気を与えてくれたのがフィリピンでのプロジェクトでした。

'06に活動を共にした卒業生が国際社会で活躍している様子を聞かせてもらう場に居合わせ、聞きながら幸せ感に浸ることがありました。それは「国際参加プロジェクト」が、国際人を育てる人材育成につながっていると感じた一瞬です。

世界を知ることはとても大切なことですが、実際に行動に移すのは難しいことです。今回の第10回「国際参加プロジェクト(フィリピン)」の出発直前、参加者の皆さんに「1分1秒も無駄にせず感動を胸の中に叩き込んでください。時間はあっという間に過ぎて行きます。皆さんが今後歩まれる道を人生という本に例えるなら、このプロジェクトはその大切な1ページになるに違いありません」とエールを送りました。フィリピンでのプロジェクトがなくなるかも知れないということを知った後であり、私自身プロジェクトに関わった数年間が人生の大事なページに相当し、行動するきっかけを作ってくれたからでもあります。

フィリピンでのプロジェクトは、いつまでも心の中に感動が蘇ります。プロジェクトの参加者は一様によかったと振り返ります。何がそんなに？と言われても、言葉で表現し難い心での問題が隠されているように思えてなりません。フィリピン人のホスピタリティーはもちろん、プロジェクトにおかけくださる諸先生方の想いとお力、綿密な現地調査、現地の方々の協力と日本から応援くださる多くの方々のお陰でもあります。直接ご指導くださった澤山先生の学生へおかけくださる念(おもい)によるところが大きいと思えてなりません。

プロジェクトの全工程の前面には出てこない影の教育、それはふと漏らされる先生の一言の中に光ります。何かを伝えようとしてくださるのだけれど、全てを明かさないうまま個人の学びにまかされる部分があり、その人の糧となる量は個人の気づきと受け取り方によりちがってきます。決して押し付けではない教育、自ら学ぶということを心がけておられたのではないのでしょうか。学生の秘めた力を伸ばす教育をされていることに心を動かされました。

参加者が得た他者への献身の喜びは、帰国後に作る文集の中に表現されますし、現地活動中の笑顔と言葉の中にも感じました。「国際参加プロジェクト」の目的である宗教性と国際性の涵養が培われたに違いありません。学生達はそれぞれに大切なものを感じ取り、帰国後に道を切り開こうと模索します。そこに先生は時機を逸せずポイントをご指導下さり、伸びる天理大学生を育てて下さいました。颯爽と歩かれるお姿から感じられる怖さと厳しさと不思議さをお持ちのお人柄にプラス、弱者へ注がれる優しいまなざしに驚くことも多くありました。「海外出張の前には必ず神殿で頭を垂れます」とおっしゃった言葉は印象的です。今年度で本学を去られることは、先導を失ったかのような心の揺らぎを覚えます。学生の最も近くで、影の力で大きく支えてくださった先生、そして「国際参加プロジェクト(フィリピン)」にお心をおかけ下さったすべての皆様に、お礼申し上げます。フィリピンでのプロジェクト終焉の文集に、その機会をあつかましくも申し出ました。心から厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

第1部

参加者感想

Our impressions

天理大学「国際参加プロジェクト」のエッセンス	
～天理スピリットの継承を願って～	澤山 利広……23
「心」で受け入れる大切さ肌で感じ	
ダラワン・ベセスナ・アコン・ドゥマティン・サ・ピリピーナス!	
	椋野 まゆみ…24
大好きなフィリピンへ!!	椋野 美和……25
I hope..	奥 きよか……26
フィリピンというステージで!!	安田 美貴子…28
Hanggang sa muli(また会う日まで)!!	久保 真百……30
フィリピンでの活動を終えて	岡島 美佳子…32
きっかけを与えてくれた旅	北嶋 美根子…35
初めてのフィリピン	貝増 舞……36
たくさんの出会い	柳川 賀津子…38



天理大学「国際参加プロジェクト」のエッセンス

～天理スピリットの継承を願って～

澤山 利広

フィリピンでの「国際参加プロジェクト」は今回をもって終了します。そのことは2008年度が始まった頃には想定されていました。私も研修途中の12月半ばには、当年度で天理大学を辞することが決まり、本活動の幕引きを最後の仕事と位置付けました。

このプログラムの目的は、「他者への献身」を国際的なスケールで実践し、宗教性と国際性を涵養することにあります。そのため、現地での活動同様、派遣前の語学・技能修得研修、さらには帰国後の体験の定着と各方面へのご報告のための文集作りを重視してきました。

フィリピンでのプロジェクトを進めるにあたり留意してきたことは、「教学協働」と「社会学連携」でした。前者は天理教団のネットワークやノウハウを活用させていただくという点もさることながら、天理教を含む宗教エッセンスを取り入れた人づくりを意味します。天理大学は天理教海外伝道者の養成機関を前身とする学校ではありますが、今では天理教信者とそうでない人々とのアゴラ（市民の集会等の場）となっています。特に地域文化研究センターは、構成メンバーのディシプリンは異なりながらも、多文化を調査・研究するコスモス（秩序整然とした統一体としての世界）の形成を目指していることを意識し、「国際参加プロジェクト」の企画は、天理教をはじめとする様々な宗教に接しながら人々の拠り所に敬意を払える国際人の育成を重視してきました。後者は世界に開かれた大学を志向し、大学が地域に育まれていることを考えれば、キャンパスの内と外での知恵と経験との交流は、海外での活動であっても当然のことです。このプロジェクトで現地の情操教育や保健衛生の改善などに取り組むことができたのは、これらを実施するに足る十分な技術を備えた市民の参画があったことは明らかです。これら2つの要素が「国際参加プロジェクト」を宗教私学ならではの教育プログラムとして特徴づけ、グローバルとローカルの両方向に支援の輪を広げながら発展させてきた理由であったに他なりません。

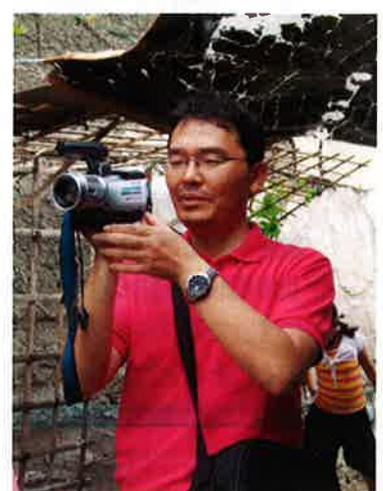
本文集のチェックを何度となく繰り返し、フィリピンでのプロジェクトの軌跡を振り返ると、さらにこの続きがあることに気付かされます。それは天理スピリットの伝播です。浅学の私はその含意を「陽気ぐらし」世界建設に集約できると理解していますが、それは世界平和を希求する全ての人々が共感できる普遍の真理です。このプログラムに参加した我々のこれからのミッションは、様々な形で天理スピリットを具現化することであると自覚しておきたい所です。それは華々しく大規模な企てでなくても、「汝の隣人を愛せ」や「無財の七施（眼施、和顔施、愛語施、身施、心施、床座施、房舎施）」*のような、日常の生活での心がけから始められることにこそ真髄があるように思います。

最後に、当プロジェクトをご支援いただいた学内外の方々に深甚のお礼を申し上げます。既に天理大学を離れた身ではありますが、今さらながら再認識することがあります。それは現地に出向いたどのメンバーが欠けても、このプロジェクトが成り立たなかったのはもちろん、周りでヒヤヒヤしながら見守っていただいた関係者や、面識のない方々のご協力の大きさです。寄稿文の行間には、現地社会への貢献に対する期待にも増して、参加者の成長を願う暖かき眼差しがあふれています。そのお陰で帰国後の参加者からは、一様に

「与えるよりも与えられたものの方が多かった」との感想が聞かれますが、4度のフィリピン（「フィリピン・プロジェクト06」を含む）に加え、中国、インドネシアを含め、計8回のプロジェクトに携わる機会を得た私こそが一番の恩恵に与ったに違いありません。

他の国で実施されるこれからの「国際参加プロジェクト」が「感謝・慎み・たすけあい」の心を育み、天理大学のさらなる発展の一翼を担うことを心より祈念致します。

* 施すべき財、説くべき教え、恐れを取り除く力がなくても、誰もがいつでも容易にできる七つの施しを示した仏教の言葉





ダラワン・ベセスナ・アコン・ドゥマティン・サ・ピリピーナス！

天理教敷島大教会よふぼく 椋野 まゆみ

このタイトルは、私が自己紹介する時に使ったタガログ語で、「私はフィリピンに来るのは2回目です」という意味です。行きの飛行機の中で必死に覚え、今ではふとした瞬間に頭に浮かんでくるほど身につけています。これをさらっと言うと言地の人から「おお〜」っという歓声があります。お気に入りのフレーズなので本文のタイトルにしました。

今回参加したのは、このプロジェクトの「現地の人と触れ合い、自分ができることを一生懸命やった結果が彼らの笑顔となって返ってくる」というところが、これから私がやりたいこととぴったりに合致していること、そして2年前に味わったその喜びを、もう一度体験したいと思ったからです。また、自分が将来進みたい道のヒントを得られるかもしれないとの思いもありました。女の子9人だけのメンバーで、初海外の子が5人。初めは不安の方が勝っていました。活動は体力も精神力も必要で、時には力仕事もあることを知っています。しかも生活環境や食生活も全然違うところで、日本の便利な生活に慣れた子が、果たして本当に大丈夫か心配だったのです。

全11泊12日の行程の中で体調不良になる参加者もいましたが、大きな病気や怪我をすることもなく、最終的には全員が元気で帰国できたことは、親神様のご守護あつてのことだと思います。また、先生方の甚大なるご配慮とご支持があったからこそ、プロジェクトの活動が円滑にできたことは言うまでもありません。

私が以前訪れた2年前に比べれば、学校でのIDカード導入や自家用車の増加、スーパーマーケットでのエコバッグ販売など、発展や変化がたくさんありました。しかし、人の温かさや親切さは当時と何ら変わっていませんでした。同じ街並みが私を待っていてくれました。トライシケルの運転手のスマイルには「フィリピーノ・ホスピタリティ」があふれていました。

私は、先進国と途上国との格差を少しでも縮めたいという想いがあり、将来は途上国の生活の改善に関わりたいと考えています。しかし今回、国と国との格差よりも、フィリピン国内での格差が想像以上に大きいことを知り、とても驚きました。サンタローサ市でさえも、お金持ちの家は「超豪邸」と言う言葉がしっくりくるほど大きく、玄関の門は立派で、ダイニングキッチンが3つもあり、お手伝いさんまでいるのです。一方で屋根の穴をダンボールでふさいでいるような家もたくさんあります。けれども、屋根が穴だらけでそれを修理するお金がないから不幸だという概念を彼らは持っていないということです。周りには愛する家族や友達がたくさん居て、それだけで幸せなんだと、彼らの笑顔が語っていたように感じました。どんなに貧しくても人々は陽気に笑い、おしゃべりに花を咲かせていました。とにかく陽気で楽しそうでした。私たちのような外国人と目が合えば必ず微笑んでくれるのです。そこに、天理教の目指す陽気ぐらしを見た気がしました。

天理教はNGOやNPOなどの団体とは違い、国の発展のための経済援助や技術支援を行う「物理的」な救いではなく、「心」を救うのだというのを聞いてとても腑に落ちました。経済発展や国家間の格差縮小は重要な課題ではありますが、心を救うことができれば、経済格差なんてものも軽微なものに思えてきます。心が救われなければならないのは私たち日本人であり、今回のプロジェクトで心を救われたのは私自身だったのかもしれませんが、大好きなフィリピンに恩返しができるよう、今後この強い気持ちを忘れず、高い意識と責任をもって行動していきたいと思っています



大好きなフィリピンへ！！

天理教敷島大教会よふぼく 椋野 美和

今、日本に帰ってきて思うこと。「フィリピンにまた帰りたい」ということ。あの、心の温かい国へ帰りたい、そう思った。

今回の参加は、私にとって2度目参加の理由も2つである。1つ目は、昨年教職を目指すべきか悩んでいた私に、教師を目指したい！と思える大きなきっかけを与えてくれたのが、このプロジェクトであったからだ。昨年のリコーダー指導でメンバーや子ども達から大切なことを学んだ。本気で子ども達に向き合う、そうすればきっと子ども達に思いが伝わるということ。そう思わせてくれたフィリピンにもう一度行きたいと思った。

サンタローサに着くと、懐かしい町並みやトライシクルが待っていた。それらを見ると、昨年の感動が蘇ってくるようで「よしっ！来たぞ〜!!」と胸のワクワクが抑えられないくらいだった。

小学校のリコーダー指導では、昨年とは心持ちは違った。昨年は全力で楽しもう！という気持ちが強かったが、今年は初めての授業を前に緊張している自分がいた。今回のプロジェクトはそれほど自分にとって大きなものであり、どれだけ期待や楽しみ、不安を持ってきたのかを表しているようだった。

しかし、リコーダー指導が始まるとそんな緊張はどこへやら、毎日が楽しい！必死！全力！感動！だった。指導がなかなかうまく進まない時でも、子ども達の一生懸命に指を動かすあの姿を見ていたら、私が「うまくいかないな〜」なんて沈んでいる暇なんてなかった。

また、子ども達の下手でも一生懸命な演奏を聴いていると、こんな音楽も素敵じゃないか！と思えることもあった。実際に4日間で仕上げた「レロンレロンシンタ」はとても心に響いてくるものだった。コンサートで彼らが演奏している姿を間近に見ていて、胸がきゅっと締め付けられ自然と涙が出てきた。

人は困難な場面にぶつかった時、それを乗り越えるための原動力となるものを持っているという。それは人それぞれにあるものだが、私の場合はしんどい時こそ子どもの姿が必要なのということ、それをシナルハン小学校でのリコーダー指導を通して気付くことができた。また、子ども達との交流はたった4日間のものであったが、その4日間だけでも彼らの成長をそばで見られていたことを私は幸せに感じている。

2つ目の理由は、フィリピンにいる大切な家族に会いたかったことである。家族とは昨年のホストファミリーのことであるが、私を家族の一員として迎え入れてくれた彼らに再び会いたいと思った。フィリピンの皆さんに共通して言えるのは、とても温かくて、とにかく明るい！私のホストファミリーもそのような家庭だった。いつも笑顔の絶えない素敵な家庭なのだ。英語はお互いに母国語ではないけれど、めいっぱい会話したり、冗談を言い合ったりしている時間が楽しかった。

ママは時々、近所の親戚の家や友人宅に私を連れて行き、「私の新しい娘よ」といつも紹介してくれた。その台詞を聞いたたび私は嬉しくなったが、ひとつ大きなことを忘れてい

た。私はママのことをいつも「Aida さん」と呼んでいたのだが、ある日ママから「あなたはいつも私のことを Aida さんと呼ぶけれど、ママと呼んでね、娘なんだから」と言われた。その時はとっさせられ、私が家族になろうとしていなかったのかなと反省しつつも、そう言ってくれたママの気持ちがとても嬉しかった。そして今、私にはフィリピンに帰るところが2つもあることを幸せに思う。

今年、昨年のホストファミリーを訪れた時にも昨年と同じように、「美和が来たよー！」と、皆が笑顔で迎え入れてくれた。家々からどんどん家族が出てきてくれて、皆で集まって思い出話に花を咲かせた。「家族っていいな」、純粹にそう思わせてくれるフィリピンを私はうらやましくも思えた。いつも人々の笑顔と笑いの絶えない、温かい国フィリピン。人と人の近さ、温もりの近さを言葉で表すのは本当に難しい。言葉で表現すれば軽く聞こえてしまうから、簡単に言葉で表すのがもったいないくらいの感動がそこにはあった。もしかすると、フィリピンの人々の心は日本人よりもはるかに豊かなのかもしれない。フィリピン共和国としてはこれからも社会的、政治的、経済的な発展を目指すだろうが、今の彼らの温かい心は変わらずにいてほしいと願うばかりである。こんな素晴らしい国へ、また必ず帰りたい。フィリピンにいる時からそう思っていた。

ある晩、夜空を見上げたとき、暑い気候の中で北斗七星とオリオン座を見た。そのとき思ったのは、日本もフィリピンも同じものが見えるくらい近くにあって、世界は繋がっているのだということ。だから、必ず帰ってこようと決めたのだ。最後に、天理教東本大教会サンタローサ出張所の先生方、ホストファミリー、プロジェクトのメンバー、そしてご協力いただいた多くの方々に感謝したい。皆様のご協力なしにはこの「国際参加プロジェクト」は成功しなかったと思う。心から感謝しています。本当にありがとうございました。

コラム② 《トイレ&お風呂》

フィリピンと日本の文化の違いを一番身近に感じることはできたのはトイレとお風呂でした。トイレとお風呂(シャワー)は一つの空間で、日本でもよくあるユニットバスのような形式です。

まず、基本的にトイレには便座とトイレットペーパーはありません。便座がないので「空気椅子」状態で用を足していました。そしてトイレットペーパーはなく、使ったとしても便器に流してはいけません。排水設備などが十分ではないため、配管のつまりの原因にもなってしまうからです。また、水洗式トイレなのですが水を流すレバーがないので、便器の横に置いてあるバケツから手桶で水を汲んで流します。手動式水洗トイレです。これがまた流すのが難しい！

フィリピンは常夏の国なので、お風呂でお湯は出ません。シャワーから出てくるのは水だけです(お金持ちのおうちに行けば給湯設備がありますが、一般家庭では水のシャワーが主流です)。ちょっと鉄臭くて初めはみんな抵抗があるのですが、慣れると案外気持ちいい?! さらに、お肌や髪の毛の調子が多くなったという声が続出でした。シャワーがないおうちもありますが、その場合はトイレの水洗と併用しているバケツと手桶を使って水浴びをします。立ちっぱなしでシャワーなので、日本の湯船がちょっと癖恋しくなりました。



トイレ&お風呂



I hope...

天理教笠岡大教会よふぼく 奥 きよか

天理大学「国際参加プロジェクト」に社会人として、また、よふぼくとして参加させていただき、人と人のつながりの大切さを今まで以上に感じさせられました。

初めての海外、私の英語力はほぼゼロに等しく、もちろんタガログ語なんて喋れない、しかし不安よりも期待が大きく、なんとかなるでしょ！という思いで出発の日を迎えました。

私の参加志望動機は、こどもが好きだからという理由でした。サンタローサの子ども達は、とても明るくいつも笑顔で私たちを迎え入れてくれました。リコーダー指導では、こどもたちの吸収しようとする姿勢に圧倒され、大成功のコンサートには、「ありがとう」とお礼を言いたいくらい感動させられました。小学校での文化交流では、小さな体をおもいきり動かし、楽しみ、喜んでくれました。そして、私たちが街を歩いているだけで、声をかけてくれる子ども達も増え、いつの間にか長い列を作り、出張所まで付いて来てくれる子ども達もいました。子ども達の笑顔を見ていると皆も自然と笑顔になり、子ども達に支えられて活動が出来ていることを実感しました。

また、私のこのプロジェクトでの課題のひとつ、介護福祉士として他国の福祉、フィリピンのホスピタリティーを知るという点では、家族・親戚・コミュニティーでのたすけあいや絆を直に見て、知ることができました。その中で、座敷牢の是非や心身に障がいを持った方々の生活について学び知るといった新たな課題が生まれました。日本で「福祉」と言えば「福祉制度」や「福祉施設」という国の施策を想像することが多く、どこか冷たい印象を持っていました。働きながらも、本当にやりたいことは何かと日々悩んでいたものに少しずつカタチが見えてきました。今後私が、私の思いをカタチにするため伝え、理解してもらうには大変なこともたくさんあると思いますが、この経験が力となり助けてくれると、自信につながりました。

そして私は、ひとりのよふぼくとしても成長することができたことを、とても嬉しく思います。海外でのお道の布教を窺い知り、フィリピンの方々のこころの寛容さに頭が下がる思いでした。そして、プロジェクトの期間中には、おさづけを取り次がせていただくこともありました。声も手も震え、感動で涙が出そうになりました。私自身、体調を崩し皆に迷惑をかけてしまう事もありましたが、参加者が誰一人欠ける事無く帰国でき、大難を小難、小難を無難にたすけていただいたこと、本当にありがたく思います。

フィリピンで出会った多くの方々や友達に支えられ、12日間楽しく幸せに過ごすことができました。日本に帰って来た今、フィリピンの家族(ホストファミリー)に会いたくて、帰りたい思いでいっぱいです。今度会う時は、タガログ語でたくさん話をしたいです。

このプロジェクトに誘って下さった高校時代の恩師の椋野先生をはじめ、支えて下さった先生方、一緒に参加したみんな、ありがとうございました。私は必ず、思いをカタチに、夢を叶えます。本当に、ありがとうございました。



フィリピンというステージで！！

国際文化学部アジア学科中国語コース4年 安田 美貴子

みなさん、本当にお疲れ様でした。今回、「国際参加プロジェクト」に参加して、私が「フィリピンは楽しい!!」と想像していたイメージとは裏腹に、私にとって苦手なものがたくさんありました。フィリピンは、そんな苦手だらけの私に克服するチャンス、達成するステージ、そして大きな感動を与えてくれました。またフィリピンの発展について考えさせられました。

私は今まで仲のいい友達と行きたいと思うところへどこへでもでかけ、自転車やバイクで台湾一週したり、北海道一周したりと自由気ままな旅行を楽しんできました。今年4月から社会人になる前に、大学4年間本当に自分のしたいことだけをして、このまま社会に出ていくのに不安を感じました。社会人になる前に「人のために役に立ちたい!」、そういう気持ちがこの「国際参加プロジェクト」に参加するきっかけとなりました。

出発する前、子供たちとリコーダーと一緒に学ぶことができる、ホストファミリーと楽しいLifeを過ごせる、フィリピンの人たちと楽しい交流ができるなど、そんなイメージを描き楽しみにしていました。しかし、今回のプロジェクトで、私はまず「リーダー」という大役を引き受けることになりました。自由気ままに過ごしてきた私にとってみんなの先頭に立って引っ張っていくことは、正直向いていないと思いました。2つ目に直面したことは、メインのリコーダーが苦手であること。毎週のリコーダーの研修が憂鬱で泣きそうでした。リコーダーを吹けないどころか楽譜を見ても音符♪が読めない(笑)。簡単なドレミ、指の使い方は分かるけど、ひとつひとつ指を押さないと吹けない。本当に私はこんなんでリコーダーの指導ができるのか? 3つ目に直面したことは、スピーチ。あいさつだなんて何を何から話せばいいのかさっぱりでした。しかも、英語かタガログ語でするのだから余計に混乱しました。フィリピンでは行く先々でリーダーは必ずスピーチする役目があります。これには毎日頭を痛めながらスピーチをこなしました。

そんな苦手なものが多かった私は次のように考え克服しました。

- 1、〔リーダー〕今、何をしなければならぬのか、その次に何をしなければならぬのか、常に頭に入れながらみんなより先に動けるように。また、周りのメンバーは順調かどうかにも常に気にしていた。
- 2、〔リコーダー〕出発までの期間、毎日「フィリピン国歌」「レロンレロンシンタ」「小さな世界」を最低でも4回以上は吹く。メロディーをイメージしながらゆっくり吹く。
- 3、〔スピーチ〕スピーチでは、何を話せばいいのかわからなかったもので、思いついたことをメモにとり、英語かタガログ語に訳してもらおう。毎回イベントごとにスピーチがあるので、いつでもスピーチができるようにイベントの回数分のスピーチ原稿を準備しておく。

以上のことを実践してみて、自分から進んでリーダーの役目を果たせたと思うところもあったり、気が抜けてるところに「みっこ姉、出番ですよ!」と周りに引っ張られたりするところは「私まだまだできてないなあ～しっかりしなきゃ!!」って思うところもあったりで、私は本当にいつも周りのメンバーに支えられてリーダーを勤めたと思っている。感謝!!。

リコーダーについて、こんな下手な私が子ども達を前に「大丈夫かな？」と強い不安を感じていました。しかし、いざ指導してみると一所懸命吹いている子ども達の姿に胸いっぱいになり涙しそうになりました。自分は下手だから教えられない、そんな気持ちはすっかり消え、いつしか自分も子ども達に教えとることに一所懸命になっていました。グループ分けしたとき、私が担当したグループは出遅れている子ども達で、吹き慣れてない、難しい指使いに混乱している子ども達の姿を見て、そんな子ども達がなんだか自分と重なって、逆に教えやすかったのです。自分もこうやって克服したことを子ども達に伝えた。すると、子ども達も吹けるようになりました。同じように吹くのが苦手な者同士、何か通じるものがあつたのかもしれませんが。

ミニコンサートで舞台に立つ自分の教え子たちの一所懸命吹いている姿が私に大きな感動と自信をくれました。ありがとう!!

スピーチを何回もしていくうちに、イベントごとにその場面をイメージしながら自分の考えや伝えたいことがまとまって書けるようになりました。

また、こんなことが印象に残っています。交流班の交流1日目。司会進行をなんとかできるだろうと甘くみていました。交流班担当2人ともが英語で説明ができません。でも、司会進行をしなければなりません。相手は、タガログ語しかできない1年生です。とっさに私はマイクを持って先生を呼び、つたない英語でゲームの説明をして先生がタガログ語に訳して説明してくださり、なんとかゲームをすることができました。このとき、澤山先生の「フィリピンは、いきなり何が起こるか予測できない。そうなったとき、たとえ不可能なことでも何かをして埋め合わせしなければならぬ。いつも突然やからぬ。」という言葉が頭によぎり、すごく身にしみました。本当に突然英語でゲーム説明するなんて、思いもよりませんでした。まさに突然!!、このことを反省し、事前準備をすることに越したことはないと深く痛感しました。

最後になりましたが、フィリピンに行ったとき、貧富の差、川や道のゴミ、汚水の流しっぱなしなどに驚かされました。フィリピン滞在中、私は「フィリピンが発展するには？」と考えていました。周りの先進国がフィリピンに大きな援助をしていると聞いています。しかし、フィリピンではいまだにこういった状況が見られます。私たちの努力が無駄にならないだろうか？と考えましたが、そうではありません。私たちが援助していることは十分にフィリピンのためになっています。フィリピンが発展するには、フィリピン人が私たちの努力をどう受け止め、考え、動くか。また、フィリピン人自身が自国の問題を見つめ改善していくかということにあると思います。例えば、道端にゴミが落ちています。私たちボランティアが、病気や怪我の原因にもなるゴミを拾い、道をきれいにしても、フィリピン人自身がゴミに意識しなければ、また道はゴミだらけになります。私たちボランティアはフィリピン人に発展する大きなヒントを残しています。私はフィリピン人にぜひこのヒントを国の発展にいかしてほしいと願っています。私は、今回の「国際参加プロジェクト」を通してこれらのことを得ました。これらのことから4月から社会に出ても大丈夫だと自信ができました。このプロジェクトに参加して本当に良かった!! 天理大学をはじめ、住原先生、澤山先生、米田先生、辻先生、椋野先生、Sta,Rosa 出張所上田先生、佐々木先生、てい子先生、プロジェクトメンバー、ホストファミリー、フィリピンの方々、、、本当にありがとうございました☆



Hanggang sa muli(また会う日まで)!!

国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース4年
久保 真百子

今回2度目のフィリピン。今回は全ての事が驚きの連続で、あっという間の旅となりました。その中で、自分自身フィリピンの人々からたくさんの事を教えられ、気付かせてくれた旅となりました。そして今回学生生活最後、いろいろなことを気付かせられ、将来の道を教えてくれたこの活動でお世話になった人達に恩返しがしたいと思い一度参加することを決めました。しかし、一方で参加することへの不安もありました。それは、前回の活動が自分たちの自己満足で終わってしまっていないのかということでした。

そんな中、始まった2度目のフィリピン。街並みは以前とは違い、アプライヤー（小学校がある地域）では車が走り発展途上国をヒシヒシと感じさせられました。また、前回を含め二家族のHFを通して、改めてフィリピンの貧富の差を感じました。しかし、全く変わらないのは人々の相手を思いやる優しさ、温かさでした。疲れているときもいつも私を気遣ってくれたホストファミリー、本当の家族の様に再会を喜んでくれた去年のホストファミリー、ate AMAMI!（あまみ姉さん）と姉のようにいつも声を掛けてくれた小学校の子どもたち。町全体が一つの家族の様に互いに支えあって暮らす彼ら、突然訪れた私たちを本当に親切に迎え入れてくれました。少し実家に帰ってきたような気分にもなりました。

そして、今回のメイン行事であるリコーダー指導。2回目ということもあり、正直去年の経験から…大丈夫であろうという安易な気持ちが少しありました。だが、現場に行くとそうはいきませんでした。なかなか曲が進まず、時間だけが過ぎていくばかり…。発表会までには曲を完成させなければという焦りばかりが先走ってしまっていました。そんな時、誰かが「最後まで行かなくてもいいやん、楽しもう」と言ったのです。その時、驚くと同時に自分たちが何のためにここに来たのかを考えさせられました。すると、私たちの本当の目的は完璧にリコーダーを教えることではなく、楽器を演奏することの楽しさ子ども達に伝えることだと気付かされたのです。その時から、私たちは楽しむことに重点を置き、合言葉を「まず、楽しもう!」としてリコーダー指導を行いました。するとどうでしょう、子どもたちの表情が変わってきたのです。

そして、発表会。あの完璧とはいえないがあの子どもたちのエネルギー溢れる音色、引き終わった後のあの嬉しそうな表情は忘れることはありません。このとき、改めて物事は結果ではなくその過程がいかに大事だということを感じさせられました。

また、もう一つ忘れられないことがありました。それは、去年リコーダーを教えた子と話をしている時のことです。彼女がふと「あまみ達に会ってから日本に興味を持って勉強しているよ」と言ったのです。その時、私たちのしている活動は無駄なことではなかったと感じ、旅前の不安が吹き飛んだ瞬間でした。他にも、私たちが教えた曲を皆まだ覚えてくれていて、音符を歌ってくれた子たちもいました。

一方で、今回の旅は個人的には色々なことを考えさせてくれた旅となりました。今後、社会人として自分はどんな道を歩んでいきたいのか、どんな目標をもって進んでいくのか

不安ばかりの新生活でした。しかし、今回の旅で気持ちも新たに働けることの喜び、与えられた環境を十分に生かしきるのも全て自分次第なのだ気付かされ、新生活へ背中を押してくれる旅となりました。

また、今回の活動を通して強く思ったことが一つあります。それは、リコーダーを通じた交流だけでなく、まだまだたくさん私たちが相互協力しあえることがあるのではないかということです。リコーダー指導においても教えっぱなしではなくその後の支援も考慮した活動を行わなければ意味がないと感じました。したがって、このような活動を今回で終わらせるのではなくこれからも引き続き継続的に行っていきたいと強く思いました。それがサンタローサの人々と出会ったものの宿命かなと思います。だから、フィリピンを出るときさよならは言いませんでした。Hanggang sa muli(また会う日まで)!!

そして、最後に私たちが活動しやすいように協力して下さった大学の先生方、サンタローサ出張所の方々本当にありがとうございました。皆様のご協力のお陰で充実した活動をさせて頂くことができました。本当にありがとうございました。

コラム③ 《フィリピンの水まわり》

フィリピンの生活でビックリしたことは、水のこと。飲み水はすべてミネラルウォーター



で生活するが、それ以外は水道水。水道水と言っても日本みたいにきれいに浄化されて飲めるなんてものではない。水の匂いがとても生臭い。赤水なのだ。そんな水でシャワー、洗濯、歯磨きする。シャワー、洗濯するのはいいが、歯磨きするのは口に水のバイ菌が含んで体調壊すのではないかと心配になる。あと、トイレの水が流れなかったり、手洗いの水が出なかったり、日常茶飯事である。

ラグーナ湖

家庭であれば、近くにバケツがあり水を汲んで流せるが、公共トイレにはなかったりする。そういうときは放置せざるを得ない(泣)。かなり申し訳ない気持ちにさせられる…また、トイレの便座もなかったりもするので、快適に用を足せないことが多く、「便座があらへん、水があらへんってそれってほんまに水洗トイレ？」って疑いたくなるほどトイレの機能が無い(笑)。トイレという形だけがある!

もうひとつ驚かされたことがある。学校や家庭で出る廃水は廃水ポンプを伝って流れるのではなく、そのまま地上に平気で垂れ流し。もしくはラグーナ湖に流す。廃水…食べ物のカスや洗濯水などが地面や湖に散乱してる!それを見て「え?うちらが食べてる魚って確かラグーナ湖産のはず…」ぶったまけた!廃水で育った魚を食べたかもしれんと、自分の身体に異変起きへんやんな?って不安になった!そんなビックリ、不安になったフィリピンだが、フィリピン人はそれが当たり前のように生活してる!自分も大丈夫だと言い聞かせ過ぎしたが、せめて衛生面で安心できる環境を作る必要があると思った!



～フィリピンでの活動を終えて～

人間学部人間関係学科社会福祉専攻4年 岡島 美佳子

現地では、笑顔の関わりを通してフィリピンの方々に喜んでもらえるように、また、いろんなことに挑戦し、たくさんのかつことを吸収することを目標に活動に取り組みました。

初日は、出張所でオリエンテーション。私のお世話になるホームステイ先があるアプライヤ地区は、かつてドラッグの危険地帯だと聞きました。さらに、これから10日間現地で生活するにあたっての諸注意を受け、私は少し身構えました。しかし町に出てみると、現地の方々は、皆私たちを見てニコッと笑って挨拶をしてくださり、あたたかいアットホームな町の雰囲気緊張がほぐれていきました。

ホームステイ先では、初めはなれない英語やタガログ語でコミュニケーションがとれるだろうか、どんな風に関わればよいのかなど不安がありました。しかし、自分の足りない英語に耳を傾けてくれて、必死に理解しようと努めてくれる姿勢に、そんな不安もいつしかなくなっていきました。そして、もっといろんな話をしたいと思うようになり、毎日単語を調べるようになりました。もっと話がしたい、理解したいという気持ちが前に出て、自然と自分の気持ちが前に押し出される感じがありました。そして、伝えたい思いを英語で表現し直すことによって、日本にいる時よりも「自分は今何を思い、何を伝えたいのか」ということをより考え、一つ一つの言葉に気持ちを込めて相手に伝えることができました。

また、相手と通じ合えたと感じた時の感激は言葉にならず、フィリピンでのこうした体験を通して人と通じ合う喜びや楽しさを改めて知ることができました。

そして、出張所では、毎日の朝・夕のおつとめがあり、私たちも参加しました。鳴物は、現地の信者さんや子ども達がつとめていました。おちばから遠く離れた地で神様の思召しに添い、心一つにつとめられている姿に勇まされました。

さらに、信仰面では、出張所の先生と布教活動に回った際、行く先々で、天理教の布教師を待っている人々がたくさんおられました。私自身も、海外の地ではじめて外国の方へのおさづけを取り次がせていただきました。貧しい状況に置かれた人々に、ただ物を施すのではなく、貧しい人々の心を救う出張所の方々の活動に感銘を受けました。そして、おさづけを取り次いでもらった人たちが、笑顔に変わる瞬間、感動で胸がいばいになりました。

また、2月26日に活動を終えホームステイ先に帰ると、お母さんが体調を崩して喉を痛めていました。いつも笑顔で私のことを気にかけてくださるお母さんだったので、とても心配でした。そして、早く元気になってもらおうとおさづけを取り次がせていただこうと思いました。と同時に、キリスト教の方が天理教の祈りに対し、抵抗を感じないだろうか。また、ちゃんと英語で伝えられるだろうか、断られたらどうしようなどの葛藤があったけれど、何とか元気になってもらいたい一心で勇気を出してお母さんに片言の単語を並べて必死に伝えました。すると、お母さんは「自分のために神様に祈ってくれる」ことにすごく喜んでいただき、快く応じてくださいました。そして、おさづけの取り次ぎが終わると、涙を浮かべて「ありがとう」と言ってくださり、私も自然と涙が溢れた。

これまで、他宗教をどのように捉えればいいのかわからず、偏った見方をしていたように思います。しかし、キリスト教であっても、天理教であっても、神様を信じて仰ぐ姿勢は変わらないものだと感じました。

このプロジェクトのメインプログラムであるシナルハン小学校の子ども達へのリコーダー指導では、なれない指導に毎日が必死でした。リコーダーを通して音楽の楽しさを知り、楽しむ心をもって、そしてたくさん笑って生きて欲しいという思いから、私は常に笑顔で心がけ指導に取り組みました。子ども達のとても素直で一生懸命にリコーダーを吹いて学ぼうとする姿勢に、逆にこちらが勇気づけられ、それに精一杯応えなければと懸命に指導しました。少しずつできるようになっていく喜びと一緒に味わえた時も、言葉にはいえない喜びが湧いてきました。

最終日、わかる子がわからない子へと自然に自分たちで教えあう姿がありました。自分ができたら終わりではなく、わからない子に教えてあげるという優しい心の使い方を子ども達から教えてもらったように思います。そうして、最後に行われた発表会は、ただただ感動の一言でした。

マニラでのプログラム最終日、前日から喉が痛くて、翌朝には頭痛と高熱におそわれました。どうして最後に風邪をひいてしまったのかと悔やんだり、最終日のプログラムにみんなと出れない寂しさでいっぱいになりました。しかし、すぐにおさづけを取り次いでいただき、病院の治療を受けることができ、ご守護をいただいて夕方からの最後のプログラムには参加することができました。この旅を通して、これまで皆大きなケガもなく元気に活動させてもらったことのありがたさをひしひしと感じました。

そして、国際交流基金のフィリピン人日本語教師の方々へのリコーダー指導は、仲間ががんばっている姿に後押しされて、いつしか体調のことも忘れて精一杯、最後までやりることができました。思えば、これまでも仲間の存在に助けられたことが幾度もあったことにも気づきました。

また、この身上を通して、フィリピンの方々の「ホスピタリティー」に改めて感銘を受けました。あたたかいアットホームな町の雰囲気と思いやりにあふれ、支えあって生きている。私が体調を崩した際も、フィリピンの方々のあたたかい心にふれて、苦しくてしんどかった気持ちがスーっと楽になりました。そこに「陽気ぐらし」を垣間見たような気がしました。

出張所に来ていた子どもが「家がない」と言ったことがありました。私は、悲しい気持ちになりましたが、それでもその子は笑って生きています。どうして笑っていられるのだろうか。本当は辛い気持ちを隠すために笑っているのかもしれない。私は何も言葉が出ませんでした。ただただ自分の耳を疑いました。そして、今もずっと問い続けている。自分に何ができるのだろうか…。これからもこの活動で得た数々の発見と学びと向き合って、自分自身に問い続けていきたいと思っています。

この活動を終えるにあたり、たくさんの方々のご協力、思いに支えられてこそ自分たちの今があると痛感します。現地でお世話になった出張所やホストファミリーの方々、常に側で私たちの活動を支えてくださった先生方に心から謝辞を申し上げます。ありがとうございました。



きっかけを与えてくれた旅

人間学部人間関係学科宗教学専攻4年 北嶋 美根子

私の初海外は、今回のフィリピンでの「国際参加プロジェクト」でした。語学が全くできない私にとって、海外での活動に参加できたことは夢のような話です。現地での生活の中で、超えられない言語の壁に何度も泣きそうになりました。しかし、現地での2週間は、今までに感じたことのないくらいのスピードで過ぎ、充実した生活を送っていました。

出発前に感動したことが3つありました。1つ目は当初目標としていたリコーダーの数が、最終的に目標の2倍以上も集ったということです。みんなや先生方で知恵を出し合い、様々な収集方法を考え、たくさんの真実によって多くのリコーダーや折り紙などが集まりました。皆さんの思いを決して無駄にとは思いませんでした。2つ目は、布絵本を法隆寺国際高校に受け取りに行った時、作品の完成度の高さもさることながら、生徒さんのフィリピンの児童に喜んでもらいたいという思いに感動しました。本当に私たちが代表で行かせてもらえることの有り難さを感じました。みんなが一生懸命喜んでもらいたいという一心で作ったきたこの思いを、現地の人にとどけなければと、実際に目で見て、話を聞いて感じさせてもらうことができました。そして3つ目は、時間の合間をぬって一生懸命準備を進める仲間の姿、人のために尽くすことが喜びと感じる先生方との出会いでした。目に映る光景を意味あるものとして捉え、吸収したいと思いました。

いよいよ、出発。久保さんと朝は4時起き!のはずが2人とも寝坊。急いで準備をし、ついに念願の初海外の旅が現実です!

現地に着いてからというもの、ご飯が口に合わない、トイレの便座がない、虫に大量に噛まれる、ホストファミリーと会話ができない、そして暑い!!!!こんなので2週間やっていけるのか自信がなくなり、早くも初日の晩からホームシックにかかってしまっていました。唯一、出張所でみんなに会える時間だけが気楽になれる時間でした。日を重ねる毎に、周りの仲間も現地の環境に慣れ始め、自分ばかりが取り残される中、なぜ私だけが慣れないのか…。私は何をしにここにきてるの、と初心となかなか慣れない自分とのギャップに焦り、不安ばかりが募っていきました。しかし、ある晩、いつも一緒に寝ているホストファミリーのおばあちゃんがそっと手を握って寝てくれました。その時の何かに守られるような安心感は例えようのないほど、温かく大きいものでした。それ以来、自分が近づいていこうとしていない壁を作っていることに気づけ、見ていた世界が少しずつ変わり始めました。

メインイベントである、小学校でのリコーダー指導。4日間というとても短い期間でしたが、コンサートの時に見せたこどもたちの笑顔に元気をもらいました。最終的に我が子のようにこどもたちが可愛く、別れが寂しかったです。技術を身につけるために求めてくる姿勢の高さ、分からない子には分かる子が自然と教えている光景、万国共通のこどものキラキラした純粹の眼差しに何度も感動しました。

サンタローサのシナルハン地区を回らせていただいたり、現地の人たちやお世話になった先生方を通して「恵まれている」とか「幸せ」ってなんだろう、って何度も考えるチャンスをもたらしました。また、国際支援って難しいなあ、何なんだろうって思いました。裕福になることが果たしていいことなのか、裕福になることで今まであった良きものが壊れてしまうのではないかと思いました。だから本当に何を必要としているのかということを考える良きチャンスとなり、この旅では国際理解を深めることができました。日本に帰ってきて、いろんなことを改めて気づかせてもらうことができたように思います。フィリピンで過ごした2週間は私の宝物です。私の視野を大きく広げてくれる、価値観を変えてくれるきっかけをもらった旅になりました。

初顔合わせのことを思い出したら、笑えてきます。それも、2週間の旅が濃いものになったからだと思います。本当にみなさんには助けていただき、とっても感謝しています。このプロジェクトに参加できたことを幸せに思います。本当に最高のメンバーに協力してくださった方々に出会えたって心から思います。この出会いにお引き寄せに感謝します。ありがとうございました。

Kumusuta po kayo!!!!

コラム④ 《住原先生ちょちょ事件》

私、北嶋は、ホームステイ先から出張所への行き帰りはパパのジブニーで送り迎えでした。とある日の夕方、住原先生も用事があるため一緒に帰ることになりました。その日はホームステイ先のハンサムボーイの息子さんが一緒に迎えに来てくれていました。また、久保さんも一緒に同乗することになりました。とするとジブニー1台に、5人が同乗しているので狭い…。久保さんと私は安全な椅子に座っていました。ジブニーは震動がよく伝わります。また道も平らではないため揺れが激しいのです。そのため捕まっていなくて落ちてしまいそうになります。そんな時、私達の目の前にセクシーな手がちょっと見えているではありませんか。ハンサムボーイの手だと思い、2人でなぜだか手を触り始めました。するとついには向こうが握り返してくれたんです！私達はわお！！って思い頬をピンクにしていました（笑）するとニョキッと住原先生が覗いて来られました。どうしたんやろうと思っていたら、どうかしましたか？と聞かれ、その時触っていたのは住原先生の手だったのです!!! もう私たちの勘違いの甚だしさに大爆笑でした。





初めてのフィリピン

国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科ドイツ語コース1年

貝増 舞

フィリピンは、私にとっては初海外ということや英語が苦手ということもあり、正直初めは期待より不安のほうが大きい状態で出発の日を迎えました。行きの飛行機の中ではとにかく必死にタガログ語での自己紹介の暗記に費やしました。しかし、いざフィリピンに到着してみると、日本とは異なる風景に興奮しているうちにあっという間にサンタローサに到着しました。着いたその日からホームステイが始まります。コミュニケーション面での不安がありつつホストファミリーと対面しました。私のホストファミリーは聞いていたようにすごく若い子ばかりの家族でした。みんな同世代ということもあり緊張している私にたくさん話しかけてくれて、会話の面で抱いていた不安はすぐなくなり、初日から本当の家族のように打ち解けることが出来ました。特にハイディ、ジェニファーとコリーンとはホームステイの10日間、本当の姉妹みたいにずっと一緒にいろいろな話をしたり、テレビを観ながらいろいろ語ったりと初めから会ったばかりとは思えないぐらい仲良くなれて、自分でもこんなにホストファミリーと馴染めたことにびっくりでした。フィリピンは日本以上に親戚や、友人とのつきあいは親密で交友関係を大切にしていると感じました。ホストファミリーの知り合いの家に行ったり、話したりした時もすごく優しく、初対面である私のことも快く迎え入れてくれました。思っていた以上にすごくありがたい歓迎をされて本当にうれしかったです。日本ではこのような親密な近所付き合いはないし、初対面の人をこれほど温かく迎え入れてくれることは少ないと思いました。フィリピンに来てフィリピンの人たちの人柄が本当に大好きになったし、日本人も見習うことがたくさんあると思いました。

このプロジェクトで一番心に残っているのは、もうひとつ不安だったリコーダーの指導法についてです。リコーダー指導は、当初予定していた23日がエドサ革命記念日のために急遽休みになってしまい、予定より1日少ない4日間になりました。私自身リコーダーが苦手ということや、人に教えた経験がなかったのでとにかく必死の一言でした。グループ内でも個人に分かれてからの指導では、とりあえず簡単な英単語や体を使って言いたいことを分かってもらえるように一生懸命伝えようとしていました。上手とはいええない私の教え方にもかかわらず、子ども達は1時間の授業の間ずっと真剣に私の言っていることを

聞いて、一緒になってまねをして覚えようとしてくれました。リコーダーで一節吹けたら私のほうを見てニカッと笑顔を見せてくれる子ども達の姿を見たら、自然と私まで笑顔になれました。最初はみんなで音を合わせようとしても全く曲に聞こえなかったのに、練習を重ねていくうちにかすかに曲っぽく聞こえてきた時は、すごく嬉しくなって「オッケー！オッケー！」の連発でした。リコーダーを指導するうえで思ったのは、やはり人それぞれリコーダーの得手不得手があって全員が完璧に演奏できたわけではなかったけれど、苦手な子もその子なりに諦めず練習している姿や、得意な子が苦手な子に教えている姿を目にした時には、「まだ小学生で小さいのにちゃんと助け合いの関係ができてるんや。」と感心することが多かったです。周りにいる大人たちの温かい人柄が、このような子どもを育てるんだと感じました。

子ども達がどんどん上達していく姿とか子ども達の笑顔を研修中ずっと近くで見ていると、みんながみんなすごく素直で可愛くて、自分が本当に子ども達の先生になった4日間でした。リコーダーの指導を終えた小学校の帰り道やホストファミリーの家に帰る時にも、いたるところから私を呼ぶ「まいまいー！」っていう声が聞こえてきたり、どこにいても手を振ってくれたり、学校を離れても親しく話しかけてくれることが嬉しくてしかたなかったです。フィリピン滞在中は本当にアイドルの気分を味わえました。たったの4日間だったけど、自分が先生として指導者の立場にたってみて、人に何かを教えることがどんなに大変で難しいことか、ということを感じることができました。実際やってみないと、この大変さは分らなかったと思うし、達成感も味わえなかったと思います。

またフィリピンに行ってこんなにも充実した10日間を過ごせたのはホストファミリーの存在が大きかったと改めて思います。私に本当の家族として接してくれたことが本当に温かくて初めは長いと思った10日間は、自分でも驚くほどあっという間でした。初めて周りがみんな日本語以外の言語の環境に囲まれてみて大事なことは言葉だけじゃないということも分かったし、言葉がうまく通じなくてもお互いのことを知りたいという気持ちでなんとかなるもんなんやと思いました。

もうひとつフィリピンに来て知った大きなことがあります。それは格差の問題でした。格差があることは多少は知っていたけど、正直フィリピンの格差は想像以上でした。サンタローサ市内もそうですが、マニラなどの都心に行ってみると本当に一緒の国なんかな？って思うぐらいに生活環境が違うのが現状でした。どこの国にも格差はあるし、もちろん日本にも格差はあるけど、フィリピンほど住んでる家に差があるわけでもなく、交通手段もサンタローサ市とマニラではぜんぜん違うことばかりで、世界の現状を少し垣間見ることができたと思います。この現状を知って、本当に日本という国は恵まれていると思ったし、日本で当たり前のようにできている生活はすごく贅沢なんだと感じました。今の生活を当たり前だと思うのではなく、毎日働いて生活を支えてくれる両親にも感謝の気持ちを忘れたらだめだと思いました。サンタローサの人たちと接していると、決して豊かな生活ができているわけじゃないけど、みんないつも笑って、明るい人ばかりで、お金がなくてもこんなにも毎日楽しめるということが本当に素晴らしいことだと感じたし、お金があることだけが幸せの基準ではなく自分が毎日を楽しむことが一番大切ということもフィリピンの人たちの笑顔を見て感じました。短いフィリピンでの滞在で学べたことは数え切れないくらいありました。いままで持っていた価値観を変えることができました。フィリピンでの毎日はこれからの私にとって忘れられないものになり、このプロジェクトへの参加を通じて世界に興味を持つきっかけにもなりました。本当に参加してよかったです。



たくさんの出会い

国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科ドイツ語コース1年

柳川 賀津子

今回のプロジェクトに参加させていただいて、フィリピンの方々に笑顔をとくさんもらえました。そして日本では出来ない経験など、とても濃い12日間でした。

はじめは、ホームステイや初海外ということもあり、食事やコミュニケーションをとるのが大変でしたが、私の単語だけの英語を理解しようと真剣に話を聞いてくれたり、タガログ語を教えてください、とても嬉しかったです。そして、ホストファミリーのお母さんが、スーパーで店員さんに「私の娘」と言ってくれた時、ご飯も始めはお客さん扱いで手伝おうとしてもしなくていいと言われたけど、毎日言っていると「これ運んで」と言われた時、家族の一員と思ってきているんだな、とすごく実感が湧きました。

シナルハン小学校でのリコーダー指導、初めは最後まで出来るかなと思っていたのにみんなが、どんどん上手になって、上手な子が出来ない子にリコーダーを教えてくださいました。言葉はあまり通じなくても自分も頑張れば、みんなも向き合ってくれるんだと思いました。

「マガリィン(上手だね)」と言ったときの嬉しそうな笑顔、最後は私がいなくても協力し、教えあってくれてる姿はとても印象的でした。最後のコンサートが終わったときの達成感、子ども達が「サラマツト(ありがとう)」と言ってくれたことは忘れられません。お昼休みは私達が食堂でご飯を食べている時、窓の網に顔をつけて、ずっと見ている子達がいてびっくりしました。そして、生まれて初めてのラブレターをとくさんもらいました。私の名前とタガログ語が少しと漢字がいっぱい書かれているものを貰ったり、道を歩けば、手を振って挨拶してくれたり名前を呼んでくれて芸能人になった気分、とすごく嬉しかったです。

私がフィリピンに来て一番思ったことは、格差の大きさと、ゴミの多さです。道路脇で屋根が今にも抜けそうな家があるにも関わらず、お手伝いさんが何人もいそうな大きくて立派な家や、首都と地方との生活水準の違い。道端にはゴミがいっぱい捨ててあるし、衛生的にすごく悪いと思いました。今まで見たことのない光景を目の当たりにして、びっくりした反面、このような世界の現状を見るのが出来たのは、今回プロジェクトに参加できたからだと思います。そして、私達が住んでいる日本は、すごく綺麗で恵まれていると改めて実感しました。幸せの形はいろいろ、だけどお金があるから幸せ、そうじゃなくお金がなくてもすごく毎日が楽しい、ということを教えてくださいました。

このプロジェクトに参加したことで、もっと世界を知りたい!いろいろな国を見たい!と思いました。出張所やホストファミリー、先生方、プロジェクトのみんな、サポートしてくださり感謝しています。

フィリピンでのいろんな方との出会い、経験は一生忘れません!

ありがとうございました!

第2部

English Message

英文メッセージ

Message from our host families 40

Message from our host families

ホストファミリーからのメッセージ

Mayumi san, a very kind person. "Nanay" said she is pretty and funny. she is very good when she speaks in English. Mayumi san Peace! :) Mayumi san is yasashii, kimben na, reegi tadashii and funny person. I hope you come back here. We will miss you... take care always. Thank you very much :)

Micco is a kind of girl that easy to be with. She is very funny, kind and nice to talk to. At the first time we met my mother ,me and Micco go to market then we bought roasted chicken for our dinner, I found out that Micco'san. I hope you will come back here in Philippines and you are welcome to stay in our house.



～棕野まゆみ・安田美貴子ホストファミリーより～

Kiyoka is really a happy peason. We enjoyed her company so much. Yung stay nya sa'min for 1week grabe! Namimiss talaga namin sya.

First day palang nya sa'min para syang member of the family kasi sobrang lapit na nya sa'min at hindi na sya nahihiya.

Maaga syang gumising ng morning,never syang na-late!Masipag,tumutulong sa ganaing bahay,naghuhugas ng pinggan at nagtry din yan magluto minsan.

Sa gabi,lagi naming tinatanong "Ano gusto nya breakfast at dinner?" ang lagi nyang sagot "Ano mairerecomend nyong masarap!" Pero kahit ano kinakain nya at lahat ng iahin namin e masarap para sa kanya.

Kasama din namin syang magsinba ng a Saturdays,sana makasama pa namin sya ng matagal, kaso last day na eh.Happy...Mamimiss taraga namin sya. Sana nag enjoy din sya sa company namin. Pede next year sya ulit? He he he.

Kiyoka we'll gonna miss you! Always take care god bless!
Good luck!



～奥きよかホストファミリーより～

It was a great privilege and honor to be chosen as the host family for me. Miwa Mukuno is very warm and loving student of Kobe university. We had a very nice and memorial experience with her. Our family learned a lot from her culture,her family and her mission in life as a teacher although her stay in our home was too short. We will be glad that she will visit us again in near future.

Aida C.Neri



～棕野美和ホストファミリーより～

Miss MIKAKO (OKACHANG) is a good person, She love's children very much.

My family is very happy to meet MIKAKO. We thank you for all the things that you've thought, as even you are Japanese and also thank you for your gift to my daughter. I hope this project will be continued as years go on, Again. Thank you very much. OKACHANG, we love you, & good luck on your career , " SAYONARA"....



～岡島美佳子ホストファミリーより～

Ako ai Eng Leticia Bascon 75 years old naging Tagasubay bcep ni miss Mineko Kitajima. Dumating oiya oc amin ng Feb 2 . araw ng saba

～北嶋美根子ホストファミリーより～

I can say that the Tenri University project is really a success !

They really made it through the help of the teachers,staff and of course of the students... Everyone gave a memorable experience to all pilipino that they encountered especially to their Host Family . Even though they can't speak English or communicate easily because the difference of the Language , but still they made it to become close to their Host Family .And one more thing ,they've been really close to the students that, they taught recorder. SIGN LANGUAGE REALLY WORK FOR THEM ! hahaha

About our host student Mai Kaimasu, she's been really nice to my family who love jokes so much and she can ride them easily. We treat her as one of the member of our family...

Mai Kaimasu you're so GREAT !

WE LOVE YOU SO MUCH ...



～貝増舞ホストファミリーより～

Kacchan,built good relationship with our family to love others as we love ourselves to love god firts. Kacchan taught us Tae culture of Japanese people and we do know that Kacchan learned Filipino culture too. She taught our children how to love others. We do hope that TENRIKYO TOHONN and TENRI University will give us adopted students again. We do hope that friendship between Philippines and Japanese will continue and bear more fruits of good relationship forever. Our home is open to everytime, everyday for the TENNRI student. We will miss Kacchan, and other students and do hope Kacchan will come back soon here in the Philippines, may the good lord bless us all TENNRIKYO staff , students and family of all students who were here in the Philippines. Most especially Kacchan family her father, mother, sister and brother, we do hope to see you someday.



～柳川賀津子ホストファミリーより～

第3部

活動記録

Activity note

事前研修	43
現地滞在日誌	47
リコーダー指導	59
学校班レポート	63
交流班レポート	66
相撲班レポート	68

☆事前研修☆

事前研修を通じて、自分達にかかる期待の大きさを感じ、また、研修のおかげで現地でも多少の自信を持つことができました。今回の研修でお世話になった多くの方々にお礼を申しあげると共に、私達が学んだ研修内容を紹介します。

11月22日の研修はふるさと会館、2月15日・16日の研修は天理教芦津詰所、それ以外は柚之内キャンパスで行われました。

11/17(月) オリエンテーション

この日が初顔合わせでした。去年のビデオを見たり、参加者の自己紹介などが行われました。これからみんなで頑張ろうと、思いました。

11/22(土) シンポジウム『国際協力広場・シルクロードの東端からアフガンへ』

午前中は私達メンバーの他、奈良 JICA グループの方々と共に準備を行いました。

午後2時より松浪健四郎氏による「アフガニスタンをめぐる世界と日本」と題する基調講演がありました。パネルディスカッションでは国際協力について尽力されている5名のパネリストが「これまでのアフガン、これからのアフガン」というテーマのもと、熱いトークが展開されました。メンバー一同、今回の行事を通して国際理解が深まったように思いました。

11/23(日) レクチャー「サンタローサで期待される活動について」上田和興氏 サンタローサ市のみなさんと天理散策。

サンタローサ市からの帰参者の方々を石上神宮から山の辺の道、天理観光農園周辺までご案内。道中で柿を購入されたり、記念撮影などされ、1時間ほど散策しました。

11/26(水) レクチャー「日本文化と相撲」 渡邊昌文氏

この日は、フィリピンでの相撲交流に備えて渡邊先生による相撲のレクチャーでした。相撲の歴史や相撲の豆知識などたくさんを教えてくださいました。

中でもみんなが一番驚いたところは、相撲が日本の国技と呼ばれるようになった経緯でした。なんとそれは、日本両国国技館でするスポーツであるから…。あまりにも簡単な理由に一同笑ってしまいました…。フィリピンで交流する上でのアドバイスも頂きとても勉強になりました。

11/30(日) 実習「ビデオ撮影研修」 森口郁子氏

この日は、芦屋市広報チャンネルディレクターの森口さんがビデオ撮影テクニック(準備、姿勢、技法、編集など)を教えてくださいました。また、撮影する上で一番重要なことは嘘の情報を流さないこと、素直な気持ちで撮ることなどでした。私達も先生に教わったことを参考に自分達でシナリオを作り撮影しました。シナリオ通りに撮影することは大変難しく、その中で観客にストーリーの意図をビデオを通して伝える難しさを痛感しました。

12/1 (月) リコーダー研修①

いよいよ今日からリコーダーの研修が始まりました。天理中学校の米田先生にご指導いただき、リコーダーの持ち方や吹き方など自分達が実際に教えることを想像しながら学びました。「エーデルワイス」「春の小川」「ドレミの歌」などの曲を練習し、皆で演奏しました。現地の子ども達にリコーダーを通して演奏する楽しさを伝えて、喜んでもらえるように、これから一生懸命練習しようと思いました。

12/3 (水) タガログ語研修①

タガログ語研修初日のこの日は、フィリピンの基礎知識を学んだり、フィリンについて知っていることを話し合ったりしました。最初は、基本的な短文、そして実用的な単語などを学びました。タガログ語は、読み方がローマ字読みなので読みやすかったけれども、文法には苦戦しました。



12/8 (月) リコーダー研修②

課題曲として「富士山」「茶つみ」が出されました。初めに、一人ずつくじを引きメンバーの前で演奏する順番を決めました。いつものメンバーではありますが、いざ発表となるとどことなく緊張した雰囲気になりました。全員が米田先生から「はい、オッケー」をもらいました。

「フィリピン共和国国歌」「小さな世界」「ミッキーマウスマーチ」などレベルの高い曲に進みました。米田先生はいつもニコニコされて「みなさんいいですね～」「うちの生徒たちもこの位出来たらな～」とおっしゃりながら、どんどん研修は進んでいきました。「小さな世界」はフィリンでも良く知られており、メロディーも簡単なので、課題曲として良いのではないかと考えました。

12/10 (水) タガログ語研修②

タガログ語研修 2 回目のこの日は、前回より少し難しい短文を学んだり、よく使う単語を覚えてもらいました。前回よりも、少し理解できるようになり良かったです。

12/15 (金) リコーダー研修③

小学校で教える曲と私達が発表する曲が決定しました。子ども達に教える曲は子ども達がよく知っており、ドレミも覚えやすいという理由で「レロンレロンシンタ」とし、私達が発表する曲は「フィリピン国歌」に決定しました。

1/14 (日) おつとめまなび

おつとめまなび(天理教のおつとめの練習)に参加しました。初めておつとめをする者にとっては、とても貴重な体験になりました。

1/19 (月) リコーダー研修最終日

リコーダー授業最終日、早くもこの日を迎えました。と同時に、出発までの時間が迫っていることを実感しました。練習初日は久しぶりに触るリコーダーにぎこちなさもありましたが、練習を重ねるごとに上達していきました。米田先生はほめ上手で、いつもニコニコされていました。最終日は少し早めに切り上げ、「フィリピンの子ども達に一生懸命教えるぞー!」と決意を新たにレッスンを修了しました。本当にお世話になり、ありがとうございました。

1/21 (水) 最後の研修

タガログ語研修最後の日。副詞や接続詞などの講義の後はタガログ語で自己紹介できるように辻先生を質問攻め。辻先生は、いつも私たちに優しく教えて下さり、頼もしいお兄さんのような方でした。本当にありがとうございました。

そしてその後、ポロシャツのデザインや研修終了後の予定を練ったりしました。

いよいよ1ヵ月後にはフィリピン出発です。みんなで力を合わせて頑張ろうと心新たに研修を終えました。

2/15 (日) 合宿

。1泊2日の合宿です。合宿の目的はプロジェクトの準備とメンバーの交流です。この合宿で初めて全員が揃いました。

朝10時、芦津詰所に集合し、分担ごとの準備開始です。皆の意見を聞くこともでき、はかどります。さよならパーティーで使う日本食材の買出しにも出かけました。

夕食のメニューは「お鍋」「たこ焼き」です。詰所の厨房をおかりし、皆で調理しました。食卓を囲み話が盛り上がり、1週間後の出発に向け気持ちも高まります。

そしてダンスの練習をし、分担ごとの申し送りを終えた頃には、夜中こ12時を過ぎ、疲れもピークだったため就寝です。

この合宿で、プロジェクトへの気持ちがより一層強いものとなりました。

～結団式～

2/16 (月)

出発まであと少し！みんなドキドキ&ワクワクです。

このプロジェクトの無事を祈願するために、まず天理教教会本部に参拝させていただきました。その後、地域文化研究センター共同研究室での結団式に臨みました。学長先生はご欠席でしたが、「勇み勇ませ」と書かれた色紙を頂きました。

そしてフィリピンに同行する先生方のあいさつ、そして参加者全員がタガログ語で自己紹介をし、プロジェクトにかける思いや抱負を述べました。



さあフィリピンへ...

現地滞在日誌

1日目(2/21、土曜日)

午前6時30分に天理駅集合で関西空港にバスで向かいました。出口手続きでこんなにも並ぶとは思っていませんでした。3時間飛行機に乗りフィリピンへ。機内食がとてもおいしかったです。

午後1時30分マニラ空港に降り立った瞬間、ものすごいムツとした暑さに襲われた。

日本の気温が1℃であるのに対してマニラは32℃。体温も急上昇すれば、テンションもMaxに。



私達が乗った飛行機です

フィリピンめっちゃ暑い～(><)。空港のトイレに行こうとしたら、なぜか入り口に並んでいるフィリピン人スタッフ5人ぐらいに、「Hello! Welcom to the Philippines☆」と迎えられました。「えっ!?ここで??」そんな疑問とこれからの期待、不安を胸に私たちはついに、ついにフィリピンに来たッー!

イミグレーションと税関を通過し、天理教東本大教会サンタローサ出張所の上田和興先生と佐々木晃先生に迎えられ、手配してくださったバスに乗り、サンタローサへ向かいました。街中でフィリピン名物のジブニーやトライシケルを見かけると、フィリピンに来た実感がわきました。

出張所では上田先生、佐々木先生、山内てい子先生から「何か困った時、体調が悪い時など、いつでもこの出張所に来てください」とあたたかいお言葉をいただきました。夕方、ホストファミリーが迎えに来られるまでの間、リコーダーやドスコイダンスの練習に励み、その後、夕づとめをして、ホストファミリーと緊張の対面。こうして9泊10日のホームステイが始まりました。



機内食です



庶民の足「トライシケル」



出張所の近所の様子

2日目(2/22、日曜日)



東本大教会サンタローサ出張所の月次祭



おつとめに参加しました



お手伝いしています

今日はサンタローサ出張所の月次祭でした。朝から椅子を並べたり子守りをしました。近所の人達も準備に来てくださいました。おつとめが終わった後は、上田先生と佐々木先生がおさづけをなさっていました。

そして作っていただいたご飯をみんなでおしゃべりしながら食べました。すごくおいしかった～！

午後からは、リコーダー班や各交流班の進み具合や打ち合わせをしました。ジェンカの練習がすごく楽しかったです。夕づとめまでの間は、それぞれ自由な時間を過ごしました。



ジェンカ練習



みっこさん買い物

3日目(2/23、月曜日)

本日はシナルハン小学校の子ども達へのリコーダー指導初日を予定していましたが、急遽エドサ革命記念日として祝日となり、シナルハン小学校も休みになり予定を大幅に変更せざるを得なくなりました。

朝8時に出張所に集合し、朝づとめに参加しました。その後、ミーティングを終えて、サンタローサのバランガイ（フィリピンの最小行政単位）をリコーダーのA・B班に分かれて、出張所の近辺を歩いて回りました。

その際、出張所の先生に続いて、メンバーの中でよふぼくの者はおさづけのお取り次ぎをさせていただき、中には海外の地で初めておさづけを取り次ぐ者、湧き上がる感情のあまり涙を流しながら取り次ぐよふぼくもいました。それ以外の者は、添い願いをしてみんなで神様にお願いしました。天理から遠く離れたフィリピンの地で、助けを求めて待つ現地の人々の姿を前に、おさづけを取り次がせていただくことの感動と同時に、私たちにできることは何かを改めて考えさせられました。



市の中心地にあるフィリピン料理のファストフード店“Jolibee”で昼食を済ませ、午後の行事に備えました。



サンタローサ市市長さんと

サンタローサ市の市長を表敬訪問。タガログ語での自己紹介とリコーダーを披露しました。



紙芝居上映中

次に院を訪れ、法隆寺国際高校の生徒さんが作られた紙芝居を上映し、子ども達と一緒に折り紙をしました。紙芝居を一生懸命聞いてくれてとても嬉しかったです

出張所に戻り夕づとめをして、ホストファミリーの元へ帰りました。この日は、ハードスケジュールだった為ぐっすり眠ることができました。



紙芝居を見ている子ども達

4日目(2/24、火曜日)

昨日の急な休日のため、今日がリコーダー指導の初日！集合はシナルハン小学校。壇上から全校児童にタガログ語で自己紹介。すごく緊張しました。その児童達と皆で国歌を歌い、体操をしました。胸に手を当てて国歌を大きな声で歌う子ども達は、とても可愛かったです。



←大屋根の下の校庭

さあ授業開始です！→



そしてシナルハン小学校の先生とのミーティングの後、いよいよ教室へ!!今回リコーダーを教える4年生と初対面！初めは表情の硬い子ども達も、リコーダーを持った時はとても嬉しそうでした。課題曲の「レロンレロンシンタ」を私達が演奏。それに合わせて、子ども達が歌ってくれました。まずは姿勢や吹き方などの基本から。話をしっかり聞き真面目にリコーダーに取り組む姿が印象的でした。



←教室でリコーダー指導中

小学校の食堂で昼食→



午後は文化交流の時間です。校庭ではシッポ取りゲームをしました。説明が通じていない部分もあり、味方同士のシッポを取りあうハプニングもありました。教室では新聞紙を使いかぶと作り。初めて見るものに興味津々。みんなすごく楽しそうでした。



←シナルハン小学校の子ども達

元気よく指導中→



指導の終了後、出張所でミーティングを行い、夕づとめの後、各自ホームステイ先に帰宅。

5日目(2/25、水曜日)

リコーダー教室の2日目、今日はA班、B班ともに屋外でリコーダー指導を行いました。各班のメンバーが一人あたり8～15人程度の子も達を相手にグループをすることで、なるべく細やかな指導ができるよう、そして全く吹けない子が出てこないように工夫しました。強い日差しを避けるため、屋根のある場所を選んで授業を進めました。



子ども達と昨日のおさらいをしながらも、2日後に迫ったコンサートに向けて全員が必死！一生懸命！本気！私たちの熱意が伝わってか、子ども達も慣れない楽器の演奏に一生懸命になってくれました。



3時間目、教室での活動は折り紙を通じた文化交流でかぶとと飛行機を作りました。子ども達と確認しながら折りました。「これであってる？見て見て！」と言わんばかりに「Ate（お姉ちゃん）！」とそこら中から呼ばれるので目が回るようでした。新聞を使ってかぶとも作り、最後にかぶとをかぶって手には飛行機を持ち、みんなで記念撮影をしました。



校庭では、ジャンケンゲームをしました。しかし、ジャンケンをしないで列になっている子が多くとても苦戦しました。ジャンケンで勝ち続けた子には、メダルが授与され、その後みんなでフォークダンスを踊りました。



午後からは時間があつたため、散歩に出かけたり、近くのバスケットコートで子どもたちと遊んだり、休息をとったりして、夕づとめの時間までそれぞれの時間を過ごしました。



シナルハン小学校の子ども達「かぶとかっこいい?!」

「じゃんけんゲーム優勝したの」

6日目(2/26、木曜日)

いつも通り、朝7時15分にシナルハン小学校へ登校。リコーダー練習3日目。今日もA班、B班に分かれて外で指導することになりました。A班は「レロンレロンシンタ」の楽譜を完璧にできるように進めていきます。B班は、A班に追いつけるように徹底的にドレミの指の押さえ方指導をし、楽譜をどんどん進めます。

A班は楽譜を追いかけるのに懸命で、B班はドレミの指を押さえるのに必死でした。思い通りには進まず、私達メンバーの不安が募り、焦りが増しました。A班は前日の、ミーティングで「レロンレロンシンタ」の最後の「ラ・ラ・ド・シ・ラ・ソ・ド・シ・シ・ラ・シ・ド」を「ラ・ラ・ラ・シ・ラ・ソ・ソ・ソ・ラ・シ・ド」に変更しました。子ども達の一生懸命にリコーダーを吹く姿に、なんとか明日の発表会では「曲を吹かせてやりたい!」との思いで指導が続きます。

午後は3年生に外ではフォークダンスを、中では紙相撲とメダルを作りました。みんな、マイムマイムを全力で踊ってくれました。授業が終わってからもみんな楽しそうに紙相撲で遊んでいました。



紙相撲で遊んでいます



みんな熱心に練習します



さよならパーティーの準備

午後からは、ミーティングの後、SAYONARAパーティーの準備や踊りの練習に汗を流しました。



フォークダンス (マイムマイム)

7日目(2/27、金曜日)

今日の午後はいよいよミニコンサート。

朝7時に学校に集合して全校朝礼に参加しました。フラッグセレモニーの際、私たちはステージに上がり「フィリピン共和国国歌」と「小さな世界」を演奏しました。私たちの演奏後は拍手喝采で、うれしはずかし Oh my heart!!そして、私たちは最後の授業へと繰り出しました。

子ども達も必死。私たちの指導にも自然と熱がこもり、その後のリハーサルでは急なスコールにも動じず、みんな真剣に取り組んでいました。

昼食をすませ、しばし休憩。学校内の売店で、私たちは大量のおかしを購入☆

そして、発表会の準備にとりかかりました。交流4日目ともなると、子ども達も慣れてきて、私たちの控室には子ども達の姿が！その手も借りて、みんなで準備をしました！子ども達のやさしさに本当に助けられました…ほんまにあんたらええ子やなあ…。

そして、発表会は1時間遅れのスタートでしたが、みんなで気合いを入れ直して望みました！はじめに、「国際参加プロジェクト」のメンバーを改めて紹介しました。次に、住原先生、リーダーの安田さんが代表でシナルハンの方々に挨拶をしました。続いて、この日のために練習してきた「ドスコイダンス」をしました。



学生発表中

そして、待ちに待った子ども達の演奏が始まり、1組、3組、2組、4組の順に演奏をしました。どのクラスも全力を出し切り、大成功の発表会となりました！皆が精一杯リコーダーを吹く姿にただただ感動しました！私たちもこれまでの感謝の気持ちを込めて、「フィリピン共和国国家」と「小さな世界」をリコーダーで演奏しました。最後に、リコーダーをはじめ、指導教本、交流で用いた物品、折り紙、クレヨンなどを寄贈しました。



シナルハン小学校の子ども達

最後に4年生と私たち全員で記念撮影をし、発表会は終了しました。使わせていただいた控室の掃除を終え、シナルハン小学校とのお別れの時。私たちのつたない指導に、一生懸命ついてきてくれてほんとに感謝、感謝でした。

Maraming Salamat!!

8日目(2/28、土曜日)



今日は本来のプログラムでは小学校でのコンサートの日でしたが、時間ができたため、午前中は私立サンタローサ高校 (SANTA ROSA EDUCATIONAL INSTITUTION) でバレーボールとダンスの交流会を行うことになりました。歩いて高校まで向かう道中、久々のスポーツにみんなのテンションは上がっていました。

到着すると、高校生が待っていており、自然に円になってラリーが始まりました。その後、場所を屋外体育館に移動し、試合の準備を行いました。

床が滑りやすいため、ジュースを撒いて滑らないようにしました。しかし、倒れたらベトベトになるなあと私たちは苦笑い。第1セット、一軍メンバーとの対戦。様々なハンディーをもらい、気合で望みましたが惜しくも敗戦。

続く2セット目は2軍のメンバーと対戦。次こそはと気持ちを入れ直して挑みましたが、またもや敗戦。やはり、毎日プレーしている高校生にはかないません。

最後に、まさに日比交流とも言える混合チームで汗を流しました。その後、相撲ダンスを披露し、ダンス部のダンスを見て、記念撮影をして、その場を後にしました。スポーツ交流を通して、絆が生まれたように感じました。また、みんなで力を合わせ、カバーしあい助け合いながらバレーができたように思います。

バレーボールを終え、お昼からは翌日の SAYONARA パーティーの買い出しのために巨大スーパーマーケットの SM(シューマート)へ。軽く昼食を取り、分担して買い出しをしました。3時から昨年11月に日本に来られた方々がメリアンダー*1に招待して下さいました。会場は、マリータさんのお宅。

あまりにも大きいお家とおいしい料理に一同感動。フィリピンの方々の温かいもてなしに感謝感謝の1日でした。

《写真上から》

高校生とバレーボールで交流

気合いの円陣

美味しかったです！メリアンダーの数々

マリータさん宅に招待されました



*1 mirienda とはフィリピン式の軽食で、午前10時頃や午後3時頃に用意される客人へのもてなしのこと。

9日目(3/1、日曜日)

SAYONARA PARTYの日!!サンタローサに滞在中、お世話になった方々を出張所にお招きし、「感謝」の気持ちを込めて日本食を提供しました。



朝8時に出張所に集合し、朝づとめに参加しました。その後、9時頃から担当を決めてそれぞれ別れて準備を開始しました。日本食は、おにぎり、お好み焼き、焼きそば、スープ、クレープ、白玉団子、フルーツ盛り、緑茶など用意することにしました。そして、2時に PARTY 開始!お世話になったホストファミリー、シナルハンの小学校、前日に交流した高校など、たくさんの方々が足を運んでくださいました。お好み焼きと白玉団子は大好評でした。また、カラオケも大盛り上がりで、喜んでいただけた様子でした。さらに、ここでもまたまた「ドスコイダンス」を披露しました。感謝の気持ちを込めて精一杯踊りました。みんな下手ひねりがだいぶ板についてきました。PARTYが終わり、片付けを済ませ夕づとめに参加しました。



うまい! 技あり!

夕づとめが終わった後、プロジェクト参加者はそれぞれサンタローサでの活動を振り返って一言ずつ感想を述べ、最後に全員で出張所の方々への感謝の言葉を述べました。その後、ミーティングをし、この日の活動を終えました。

たくさんの方々が SAYONARA PARTY に足を運んでくださり、本当にいろいろな方々が私たちの活動を見守り支えてくださったお陰で、私たちは活動することができたのだと改めて実感し、感謝の気持ちでいっぱいになりました。と同時に、明日サンタローサに別れを告げることの寂しさをしみじみと感じました。また、メンバーそれぞれがプレートにホストファミリーと撮った写真を貼り、各自デコレーションしたものを、家に帰ってからホストファミリーに感謝の気持ちを込めて贈りました。



ようこそ! さよならパーティーへ!



さよならパーティーに来てくださった方々

10日目(3/2、月曜日)

ホストファミリー、出張所の方々、そしてサンタローサとの別れの朝。皆、目を真っ赤にして、別れを惜しんだ。ぎゅっと抱きしめて「泣かないで、また必ず帰ってきてね」と言ってくれる家族と再会を約束し、マニラへ向かう車に乗り込んだ。みんなで見えなくなるまで手をふり続けました。

マニラへ着くと、天理教マニラ出張所にて山岸精治先生、奥様が迎え入れてくださいました。山岸先生のお話の中に、このようなお話がありました。

「重い病気が治ったとき、人はそれを「奇跡だ!」と言って驚くけれども、重病が治るとは普通の状態に戻ることである。しかし、私たちはいつも普通の状態で生かされている。つまりは、私たちが生きていること自体が奇跡なのであるから、日々感謝して通らせていただくのは当たり前なことなのである。」改めて、自分たちが健康に通らせていただいていること、メンバー全員がフィリピンで元気に活動させていただいていることに感謝し、参拝させていただきました。 **天理教フィリピン出張所にて**



お昼は、SMのマクドナルドで済まし、スーパーやデパートでフィリピン土産の買い物をしました!デパートや大きなビルの出入り口には必ず警備員が立っていて、荷物チェックなどをされます。しかも、警備員の持っているライフルや拳銃は本物です。日本では考えられないことにビクビクしました。ディナーは、バイキング形式でフィリピン郷土料理、日本料理などがズラッとあって、たくさん食べました。その中でも、子豚の丸焼きがおいしかった。また、この日は貝増さん(マイマイ)のバースデイを一日早く祝い、みんなで大きなケーキをプレゼントした。そのときのマイマイの絶頂の顔が今でも忘れません。マイマイ!!フィリピンでの19歳のバースデイおめでとう☆



お腹がいっぱいになった所で、ホテルに戻りさっそく翌日のフィリピン大学での相撲の準備作業、国際交流基金の日本語教師の方々へのリコーダー指導準備をしました。

ホテルの快適なふわふわのふとんにぐっすり就寝しました。

11日目(3/3、火曜日)

今日はフィリピンでの活動の最終日です。今日のプログラムの準備でお世話になり、終日同行いただく国際交流基金の新見康之さんと合流。

朝から体調を崩し、病院で点滴を受けた岡嶋さんをホテルに残し、いざ、フィリピン大学へ出発・・・と、思いきや、ダンボールを一つ積み忘れるというハプニングも発生しましたが、1時間程でフィリピン大学へ到着。しかしここでもハプニングが！大学が広すぎて、同じ道を2周しました(笑)。ここでの交流は、待ちに待った「相撲」。タイル張りの廊下にビニールテープで描かれた土俵、コケたら痛いだろうな・・・と思う私たちとは対照的に、フィリピン大学の学生さんは手加減なしでスゴい迫力でした。

試合後、ミリエンダをいただきながらの団欒。日本語がとても上手でした。表彰式では、「ひなまつり」に因んで、お雛様、お内裏様、三人官女の衣装を着てもらい写真撮影。周りからは、かわいい、きれいとの声。しかし、本人は「暑い・・・」。フィリピンの伝統的なゲーム「パティンテロ」を教えるもらったり、日本へ留学するという学生さんと話ができて、とても充実した活動でした。(この交流の事が、翌日のマニラ新聞の一面を飾りました！*第4部資料新聞記事ご参照)

フィリピン大学をもう1周半走り、国際交流基金マニラ日本文化センターへ。いよいよ最後の活動である現地の日本語教師の方々(参加者25名)へのリコーダー指導です。国際交流基金には、元気になった岡嶋さんと付き添いの住原先生の姿が！全員集合です。そしてここでも日本語での会話、笑いが絶えませんでした。自己紹介を済ませ、先方のリクエストにお応えして「ドレミの歌」を課題曲にしました。たった2時間足らずで一曲が完成しました。別れを惜しむ時間もなく撤収。夕食へ向かいました。

まだまだ終わらないハプニングの連続(笑)。夕食へ向かうジープニーに、何も知らず乗り合わせた方がお一人、結局、同じ場所まで連れて行ってしまいました。

夕食のレストランに到着した時は、すでに9時！頼んだ量が多すぎ、食べきれず持ち帰りました。ここで、今日1日お世話になった新見先生と別れ、夜のマニラをとぼとぼ歩いてホテルへ帰りました。その途中で国際交流基金に帽子を忘れた者が1名。最後のミーティングは11時から、この11日間を振り返り、一人ずつ感想を語り合いました。

笑いあり、涙ありの、熱のこもったミーティングとなりました。



決勝戦！



表彰式でひなまつり



国際交流基金でのリコーダー指導

12日目(3/4、水曜日)



いよいよ今日は帰国の日。本当にあっという間の2週間でした。空港へは2回に分けて行くことになりましたが、2回目の人を乗せた車が待てど暮らせど来ない。結局、出発ギリギリに空港に到着。そのため、最後のフィリピンを惜しむ暇もなく飛行機に乗り込みました。最後までフィリピン流のおもてなしに驚かされる私たちでした。皆、フィリピンに来たときは、不安でいっぱいでしたが、帰るころにはフィリピンを去る寂しさとまた、戻ってきたいという熱い思いでいっぱいでした。本当にありがとうございました。

Salamat po!!

コラム⑤

《休みにしま～す》

サンタローサに着くや否や、早速トラブルが。学校訪問予定の初日が、大統領の一声で突然祝日になってしまった。このようなことはフィリピンでは日常茶飯事なので、特に誰も慌てふためいたりしない。それは、失業率 80 パーセント（シナルハンでのインタビューによる）という時間に追われる必要のない人々が多いということも理由の一つなのだと思う。

この祝日のために小学校での指導、リコーダーの日が一日減ってしまい、丸一日予定が空いてしまった。しかし、そのおかげでサンタローサ市長に表敬訪問できたり、地元の病院に入院している子ども達に紙芝居を見せたり、折り紙をしてあげたりと、喜んでもらうこともできた。



リコーダー指導 A班

奥 きよか、北島 美根子、椋野 美和、安田 美貴子、柳川 賀津子

リコーダー指導に使用した道具

：リコーダー、模造紙に大きく書いた楽譜、笛、親指の位置表示シール

担当学年：4年生 SECTION1、2

～出発前～

当初 A 班は「キラキラ星」を指導するつもりでしたが、子ども達には「ド」が難しいので B 班同様、誰もがメロディーを知っている「レロンレロンシンタ」に変更しました。メロディーを模造紙に、音符を色分けして大きく書き、その下にタガログ語の歌詞を入れて、更にカタカナで読みがなをふりました。また、先生専用の教則本、楽譜本を作成しました。

～指導前日～

教則本には、1. 基本姿勢、2. 音階を何度も歌いメロディーを教えてもらう、3. タンギングの使い方、4. ド・シ・ラの指の使い方の4つのポイントを確認し、授業の流れをイメージしながら指導法を統一しました。



～指導1日目～

授業が始まる前は、“Hello Song”、授業の終わりには“Good Bye Song”を歌いました。授業の始まりと終わりにめりはりをつけるためです。

授業では、自己紹介した後、さっそく本題のリコーダー指導を行いました。基本姿勢は、①浅く座る、②両足の裏を地面につける、③ひじを机につけてはいけない、④背筋をピーンッ！と伸ばす。次にリコーダーの持ち方は、左手が上、右手が下（右手を使わなくても親指を添える、親指を意識しやすいようにシールを貼りました。）、リコーダーのくわえ方、タンギングを指導した後、「シ・ラ・ソ」を教えました。強く吹かないように、また穴をしっかり押さえるように指導しました。最後に歌詞で歌い、その次に音階で歌いました。とにかく、音階を覚えてもらうことが重要です。子ども達の覚えが早く、授業は順調に進みました。最後に名札をつくりました。

～指導2日目～

子ども達を5グループに分け、自分のリコーダーの音が聞こえるようにと学校の校庭で授業しました。まずは、「レロンレロンシンタ」のメロディーを何回も歌い覚えてもらいました。そして、「シ・ラ・ソ」の復習をし、「ファ・ミ・レ」まで指導したところで、子ども達の中で上達が早い A 班、上達が遅い B 班に分けました。A 班は音階の指導し、B 班はできないところを個人レッスンで徹底的に指導しました。息抜きにかけっこして遊んだりして、子ども達がリラックスできるようにしました。私たちもできるだけタガログ語で指導しました。子ども達の指の使い方を必死で覚えようとする姿に私たちの指導にも力が入りました。この日のミーティングでよくできる子にはリーダーシールを貼り、吹けない子に教えてもらえるような工夫をすることに決めました。



～指導 3 日目～



この日の目標は、「レロンレロンシンタ」のメロディーを最後まで吹くことでした。班ごとに別れてのメロディーを吹きました。しかし、いざ練習が始まると、子ども達はなかなか音符と指とが合わないようでした。結局 5 つのグループはメロディーを最後まで吹くことができず、一番進めなかった班は楽譜 2 段目にいくかいかないかでした。このままでは、明日のコンサートに間に合わない、スタッフの誰もが焦りと不安を募らせました。この日のミーティングでは子供たちには高い音の「ド」と楽譜最後の行では指の移動が難しいだろ

うと考え、急遽最後の「ラ・ラ・ド・シ・ラ・ソ・ド・シ・シ・ラ・シ・ド」を「ラ・ラ・ラ・シ・ラ・ソ・ソ・ソ・ラ・シ・ド」に変更しました。明日の発表会には、子ども達に最後まで「吹けた!!」という達成感を得、感動してほしいと一同は願いをかけました!

～指導 4 日目&ミニコンサート（発表会）～

午前中は、前日に引き続き、曲を最後まで吹けるように練習に励みました。今日の子ども達は、昨日とはとびっきり違っていました。午後にコンサートを控えているのを意識しているのか、もしくは指使いが上達したのか、一生懸命私たちの指導についてきました。懸命に楽譜を追う姿に私たちも、胸がいっぱいになり泣きそうになりました。頑張れ!頑張れ!!と私たちの願いが届いたのか、たった 1 時間という短い時間の中で最後まで吹くことができました。私たちスタッフは、安堵したと同時に嬉しさでいっぱいでした。そして、午後から発表会を控えていたので実際の舞台上で立ち位置、整列、入退場の練習をし、本番に備えました。

～本番!!～

みんな、「発表会頑張るぞ!!」とリコーダーを構え、午前の練習での疲れを全く見せず、精一杯「レロンレロンシンタ」を奏でました。普段、無邪気に遊びまわったり、いたずらしたり、授業に集中できなかつたりしていた子ども達が 1 つにまとまった瞬間でした。4 日前までは、初めてリコーダーに触れ、たった 4 日間でメロディーを奏でることは本当に難しいことです。それを、子供たちは「嫌ッ!!」ってひと言も言わずに私たちと練習してきました。その成果が、この発表会で十分に発揮され、最高のコンサートになりました。私たちは、その子ども達の姿に本当に感動しました。涙も出ました。子供たちへ、大きな感動をありがとう☆

～振り返って～

- ・ 子ども達ひとりひとりに楽譜があれば家でも練習できた。
- ・ あらかじめよく使うタガログ語を覚え、実際授業でもよく使いました。そのおかげで子ども達も理解してくれました。
- ・ 毎日のミーティングと準備のおかげで授業がスムーズに進行したことが、発表会の成功につながりました。
- ・ 教本は教育的指導に役立ちました。
- ・ リコーダーに親指シールを貼ったおかげで子供たちは親指の位置を理解できました。

リコーダー指導 B班

岡島 美佳子、貝増 舞、久保 真百子、椋野 まゆみ

リコーダー指導に使用した道具

：リコーダー、模造紙に大きく書いた楽譜、笛、親指の位置表示シール

担当学年：4年生 SECTION3、4

～指導前日～

学校班が作ってくれた教則本を基に、子ども達にどのように指導していくかを4人で話し合いました。実際に当日のことを考えながら話し合いを進めていくと不安要素がたくさん出てきて、それを補うために入念な確認を行いました。

～指導1日目～

緊張を隠しきれなかった初日。みんなで円陣を組み、気合を入れていざ教室に向かいました。1日目の目標は、音階で歌を覚え「シ・ラ・ソ」の指を教えることでした。どのクラスも本当に元気な子たちばかりで歌もものすごく大きな声で歌ってくれました。また、クラスを4つに分けて練習を進めていきました。初日は、うまくいかないこともありましたが先生方のご協力を得ながら、みんなで協力し補い合いながらできました。

～指導2日目～

2日目からは校庭で行いました。まずは、“Hello Song”を子ども達と一緒に歌って気分を高め、全体で復習をし、班ごとに分かれて練習を行いました。1人約11人、多い所では14、5人の班編成になりました。指使いを覚えることだけで時間が過ぎ、本当に曲を演奏できるようになるのか不安になりました。

～指導3日目～

3日目は「楽しめば結果は着いてくる」という言葉を信じて指導に励みました。“Hello Song”をみんなで一緒にノリノリで踊り授業スタート。グループ練習、最後の10分に全体練習を行いました。この日はクラス、個人でばらつきがありましたが、1～2段目まで進むことができました。この日から上手な児童を「子どもTeacher」に指名し、できない子を指導できる体制を作りました。しかし、まだまだ完成までの道のりは長く、明日の頑張りにかけることになりました。



～指導 4 日目～

子ども達と一緒に楽しめるのも今日が最後です。みんな「とにかく、楽しもう！」を合言葉に、授業に臨みました。この日は、A 班から奥さん（きよちゃん）が助っ人として加わってくれました。子どもたちも私たちも昨日まで以上に真剣そのもの…。昨日が嘘のような進み具合…完璧ではないが最後まで吹けた…。信じられなかった。授業最後の舞台練習では、どのクラスも曲になっていました。そして、最後は”Goodbye Song”で終わりました。



～リハーサル～

2 クラス目の授業の後、Grade4 はステージでリハーサルを行いました。他クラスも気になるのかソワソワしていました。自分のクラスが一番とばかりに愛情のヤジ???が飛びました。そして、みんなの演奏を期待するような突然のスコールが降り注ぎました。



～ミニコンサート～

いよいよ本番。開始時間が遅くなってしまったのにも関わらず、たくさん子どもたちが残ってくれていて発表会がスタートしました。

”Are you ready?” ”Ready!!!” の大きな掛け声から演奏。この時の演奏は忘れられません。元気いっぱいの音色、必死に演奏する姿、最後に達成感に満ち溢れた表情、今までで一番の演奏となりました。



学校班レポート

岡島 美佳子、椋野 美和

リコーダー指導がうまくできるように対策を考え事前から準備しました。

◆ 工夫したこと ◆

○去年の反省を踏まえて、今年は名札を作ることにしました。段ボールにカラフルな折り紙を貼り、裏面に安全ピンを取り付けました。そして、授業初日に子どもたち自身に名前を書いてもらいました。(使用例：右の写真)



○リコーダーの裏に、フラワーシールを貼り、常に子どもたちが右手の親指の位置を意識できるようにしました。

○全員が子ども達にリコーダーを指導できるよう、学校班で基礎ポイントをまとめた教則本を作成しました。これをもとにメンバー全員のリコーダーに関する指導方針を統一しました。

また、これを英訳したものをシナルハン小学校の先生方に渡しました。(第4部資料ご参照) 今後もリコーダー指導を続けていってほしいという願いを込めて…

そして、3月3日の国際交流基金マニラ日本文化センターで、フィリピン人日本語教師の方々を対象としたレクチャーの後で、この教則本とリコーダーを手渡しました。

○これも去年の反省を踏まえて、今年はリコーダー指導初日の朝に、4年生担任の先生方に集まっていただき、私たちの英語をタガログ語に訳していただくなど、指導の際の協力をお願いしました。その時に子ども達が今年のリコーダー課題曲である「レロンレロンシンタ」をどのくらい知っているのか、英語はどのくらい理解できるのかなどの事前の打ち合わせを行いました。また、担任の先生方による協力のもと指導がスムーズに進むよう、リコーダーの基本知識を知ってもらうために教則本をお渡ししました。

○“Hello Song”と“Good - bye Song”は、ビデオ研修に来ていただいた森口郁子先生にお借りした活動記録の冊子の中から参考にさせていただきました。“Hello Song”は今日の授業が楽しく迎えられるよう、毎日元気いっぱい授業開始時に歌いました。また、“Good - bye Song”は、明日もまたワクワクして授業に来てくれるよう、笑顔いっぱい授業終了時に歌いました。2日目からは、子どもたちも一緒に歌ってくれるようになり、コンサートに向かって思いが一つになっていくようでした。(第4部資料ご参照)

◆ リコーダー指導時によく使ったタガログ語 ◆

穴をしっかりとふさいで：Takpan nyo ang butas (タクパ ニョ アン ブータス)

ゆっくりゆっくり：Dahan dahan (ダアハン ダアハン)

上手だね！：Magaling! (マガリイン！)

静かに：Tumahimik (トゥマヒミック)

弱く：Mahina (マヒーナ)

姿勢をよくしてください：Tindig (ティンディッグ)

☆一言メモ☆

演奏前に…

私たち “Are you ready?”

子どもたち “Ready!”

私たち “NoNo…ARE YOU READY?? (テンション倍増で)”

子どもたち “READY!!!”

と、2回聞いてあげると、より子どもたちの気合いが入り、心が一つになりやすい！

◆ドスコイダンス◆

Why? ドスコイダンスなのか... 国際交流基金マニラ日本語センターとの共同事業としてフィリピン大学で「相撲」を通じた交流を行うことが決まりました。事前準備中も「相撲」というキーワードが飛び交うようになりました。『開け!ポンキッキー』という番組の中で、「ドスコイ」という音楽に合わせて踊る体操があり、それをアレンジしてダンスにしました。



ダンスの途中にちょっとしたサプライズ☆「Thank you Philippinas!!」と書いた大きなメッセージを掲げると同時に、感謝の気持ちを込めてみんなで声をそろえました。すると、シナルハンの皆さんから歓声があがりました。嬉しかったです。

このダンスは、初め小学校のコンサートのために練習してきたものですが、それだけにとどまらず、様々な場面で披露する機会がありました。私立サンタローサ高校 (Santa Rosa Educational Institution) でのバレーボール交流、SAYONARA パーティー、フィリピン大学での相撲交流のときにも披露しました。

指導した子どもの人数
…211名

- Sec.1 …49名
- Sec.2 …51名
- Sec.3 …56名
- Sec.4 …55名



毎日リコーダー指導が終わってから、班ごとにその日の進み具合を確認し、良かった点や反省点のふり返り、明日の目標や指導の進め方について話し合いました。

子ども達の上達具合を鑑みながら、毎日試行錯誤の日々が続きました。

みんな真剣です！→



色塗りやはさみの使い方を見ていると、子どもたちの個性がよくあらわれます。ゆっくりじっくり丁寧に切る子や、おおまかに切る子、強く濃く着色する子や、さらさらと薄く塗る子、中には力士の体を半分青色半分緑色で着色する子もいました。同じものを渡しても、子どもの数だけ全く違うものが出来上がることが非常に興味深く、感性の豊かさや固定観念にとらわれない思考の柔軟性にも驚きました。

オリジナル力士ができれば、隣や前後の席の子と「ready go!」の掛け声で一斉に試合開始！ただ、全員手加減なしに机を思いっきり叩くので、勝負は一瞬で決まってしまいました。

しかし、自分で作ったという喜びもあって、倒れても何度も何度も対戦していました。その一生懸命さが健気でかわいらしく、勝っても負けても教室には笑顔があふれていたのが印象的です。



一斉にトントン!

紙相撲でたっぷり遊んだ後は、『みんな一生懸命頑張ったので勝ち負けなしの全員が一等賞!』という気持ちをこめて、メダル作りをしました。折っても折っても同じような形になるので、少し作り方がややこしく苦戦しましたが、最後にはピンクや黄色など、さまざまな色のメダルと、元気な子どもたちの笑顔が目に見え、鮮やかでした。

折り紙も紙相撲も日本に古くから伝わる遊びですが、時を越え、国境を越えても通じる遊びだということに改めて気付かされ、日本文化の良さをフィリピンの子どもたちに教わった気がします。



自分で作った作品と一緒に

交流班レポート

【屋外】 奥 きよか、安田 美貴子

【屋内】 久保 真百子、椋野 まゆみ

交流班は2月24日（火）～26日（木）の3日間、午後の活動として屋内と屋外の二班に別れて低学年児童と交流を行いました。

2月24日（火） 1年生 342人

2月25日（水） 2年生 250人

2月26日（木） 3年生 250人

「屋外」

～事前準備～

交流班（外）での交流内容は、子ども達がルールを理解してくれるのか、簡単すぎてすぐに終わってしまうのではないかという思いがあり、ギリギリまで悩みました。そして、「しっぽ取り」「じゃんけんゲーム」「フォークダンス」の3つの準備をしました。

現地では、出張所の方々やホストファミリーに助けていただき、ゲームに必要なタガログ語を教えてくださいました。

～1日目～



1年生4クラス『しっぽ取り』

教室から整列して屋外へ出てくる子ども達は、とても小さく、とてもかわいらしく、そしてとても元気でした。先生にタガログ語訳をお願いし、ゲームスタート。赤・青・黄の3チーム対抗戦で5分の予定でしたが、数十秒でストップをかけてしまう程の素早さでした。見事、青チームのダントツ1位。プレゼントのピカチュウは大人気でした。

～2日目～

2年生3クラスとの『じゃんけんゲーム』

じゃんけんをして負けたら勝った子の後ろに付き、電車のようにだんだん長くなっていくというゲームです。じゃんけんはフィリピンのやり方で行いました。トップになった女の子は、少し恥ずかしそうにしていたのですが、メダルをかけてあげるととても嬉しそうに笑ってくれました。

～3日目～

3年生2クラスとの『フォークダンス』

この時の先生の的確な指示には、さすが!!と驚きました。毎日フラッグセレモニーでダンスをしている事もあり、子どもたちもすぐに覚えてくれました。子どもたちは疲れ知らずで、何曲踊ってもにぎやかな声が止みませんでした。（実は、3日目の交流も3クラスの予定でしたが、先生がお休みのクラスがあり、学級閉鎖だったようです。）

たった1時間ずつの交流でしたが、子ども達の笑顔が嬉しくて、大変だった準備や悩んだ事も良い思い出になりました。

お世話になった皆様、ありがとうございます。そして、純粋な瞳をした子ども達、私達を楽しませてくれて、ありがとうございます！

「屋内」

対象となる学年が1年生から3年生の低学年ということで、簡単で、すぐに作れて、楽しめる、昔からの日本の遊びというのをテーマに、1, 2年生には折り紙でかぶとと紙飛行機を、3年生には紙相撲とメダル作りを教えることにしました。折り紙の事前準備として、ひとつひとつの手順が視覚的にすぐわかるように、模造紙に大きな見本を作りました。例えば、紙飛行機の作り方なら、まず折り紙を長方形になるように半分に折っただけのものを手順1、そこからさらに次の折り方を示したものを手順2、という風に作ったものを模造紙に貼りました。紙相撲は、型紙に左右対称の力士や動物の絵を貼り、生徒にはそれを切ってクレヨンで着色するという作業をさせるようにしました。



視覚的にわかるようにして、英語の説明は補足程度にするように

小学校での活動の初日は、1年生への指導です。自分これを黒板に貼って、作り方で作ったかぶとを自分で被れるように、折り紙ではなく大きな新聞紙を正方形に切って用意しました。1年生にとってはめいっぱい体を使ってようやく広げられるほどの大きさです。急遽、1つの教室で1.5クラス分の生徒たちを指導することになり、もともと小さな教室がますます手狭になりました。しかしそんなことはおかまいなしの元気いっぱいの生徒たち。一つの手順が終わるたびに「できたよ！見て見て！」とアピールしてくるのがとっても純粹でかわいいです。



教室が狭くても関係なし！
先生が一番ノリノリ！

低学年の生徒たちには、英語はまだ理解できないので、クラスの先生に協力してもらい、私たちの英語の説明をタガログ語で訳してもらい、何とかかぶとと紙飛行機を完成することができました。

紙飛行機は校庭に出て飛ばしました。みんなおおはしゃぎで力いっぱい投げるので、ぐしゃぐしゃになってしまい、最後には飛ばすというより『投げてる！？』という子もいましたが、とにかくみんな楽しそうでした。



元気いっぱいの子も達!!

活動3日目は、3年生のクラスで紙相撲とメダル作りです。紙相撲の紙が分厚く切りにくく、しかもはさみの数が十分でなかったため、メダル作りに時間がかかってしまいました。

相撲班レポート

貝増 舞、北嶋 美根子、柳川 賀津子



事前準備 衣装作り

○衣装作り

リサイクルショップでお買い得な着物を2枚購入しました。(赤と紫)これはお内裏様とお雛様役の2人が一番上から羽織るようにします。

着物の襟や袴など、椋野先生が夜なべをして完成していただきました。

←完成したものを試着しました(笑)



○カツラ作り

バレーボールを頭の形として据え置き、新聞紙に1枚ずつ糊をつけ、重ねて張っていきました。乾いたら絵の具で黒く塗り、髪の毛は毛糸をボンドでくっつけ、お雛様、三人官女のカツラを作りました。



実技講習会の開催

壮行会后に、天理高等学校第二部の大仲先生を招いて相撲の実技講習を行いました。なれない練習でへっぴり腰ですが、笑いをこらえながらも大仲先生の熱心なご指導のお陰で、みんなも真剣な眼差しで講習を受けました。

相撲について知らないことばかりで勉強になりました。



<大仲先生のプロフィール>

天理高校第二部の先生です。二部には過去には相撲部があり、昭和55年から62年まで顧問をしておられ、個人優勝など、たくさんの生徒を育てられた先生です。今回、女相撲をご指導頂きました。

←↓大仲先生もみんなも真剣です!

ひな祭り杯の流れ (※現地滞在日誌11日目ご参照)

- ① 開会式
- ② ひな祭りの説明
- ③ 相撲の説明、型見せ
- ④ ルール説明
- ⑤ ○×クイズ
- ⑥ 個人戦
- ⑦ 団体戦
- ⑧ 表彰式、記念撮影
- ⑨ メリアダンダー



「女相撲日比対抗ひな祭り杯 フィリピン場所」進行表

時間	司会台本	備考
開会式 13:00	<p>「只今より、『ひな祭り杯—フィリピン相撲場所—』を開催します。」</p> <p>「まず始めに、国際交流基金の新見先生より挨拶があります。」</p> <p>「先生、ありがとうございました。」</p> <p>「続きまして、天理大学、住原則也先生、お願い致します。」</p> <p>「住原先生、ありがとうございました。」</p> <p>「それでは早速、始めたいと思います。イエーイ！」</p>	
ひな祭りの説明 13:20	<p>「今日は3月3日、日本では「ひな祭り」と呼ばれる日です。みなさんは、ひな祭りを知っていますか？」</p> <p>「今から簡単にひな祭りの説明をします。」</p> <p>「3月3日は女の子を祝う日です。お内裏様とお雛様、三人官女、五人囃がいます。この日だけ女の子は、甘酒と呼ばれる白くにごったお米から出来ている甘いお酒を飲むことが許され、菱餅と呼ばれている菱形のお餅を食べながら楽しく過ごす日なのです。」</p> <p>「また、言い伝えでは、3月3日中にお雛様を片付けないとなかなかお嫁にいけないと言われていています。」</p> <p>「ひな祭りの知識は深まりましたか？」</p>	
相撲説明 13:40	<p>「それでは次に相撲の簡単な説明をします。」</p> <p>「相撲は日本の国技と呼ばれています。」</p> <p>「相撲は日本古来の神事です。同時に武芸でもあり武道でもあります。また古くから懸賞金を得る為の生業（生きる手段）として、選ばれた者によって大相撲という興行が行われています。近年では、日本由来の武道・格闘技・スポーツとして国際的にも行われています。」</p> <p>「以上が簡単な説明になります。知識は深まりましたか？」</p>	
型見せ 14:00	<p>「続いて、今から簡単な型見せを行いたいと思います。」</p> <p>① 寄り切り（良い例）</p> <p>② 押し出し（良い例）</p> <p>③ 突き倒し、髪を引っ張る、顔を叩くなど（悪い例）</p> <p>※いい例と悪い例の両方を見せる</p> <p>「最後に、土俵に上がった際に行う基本動作を教えたいと思います。試合の時はこの動作を行って下さい。」</p>	型見せ、 基本動作 看板持ち (北嶋) (柳川)
ルール説明 14:20	<p>「ルールを説明をします。①今説明した技以外は使用禁止です。危険な行為をした場合、即失格となります。②相手のひざより上を地面につけたら勝ちとなります。③審判の指示に従って下さい。④制限時間は1分間です。⑤個人戦、団体戦の順番で行います。優秀な成績を残した個人と、チームには豪華景品があります。イエーイ。」</p>	

○×クイズ 14:30	「それではここでさらに相撲についての知識を深めるために、クイズを行いたいと思います。イエーイ。」 ※次ページをご参照 「何問くらい正解できましたか？相撲についての知識は深まりましたか？今日得た知識を家族に話しても楽しいですよ。」 「それではよりよい交流会になるよう、ルールを守り、おもいきり楽しみましょう。」	看板持ち (北嶋) (柳川)
個人戦 15:00	「それでは只今より個人戦を行いたいと思います。」 東：○○山あ～ 西：○○山あ～ ※トーナメント戦に従って進めていく 「お疲れ様でした。少し、休憩時間を取りたいと思います。○○分から開始しますのでそれまでに元の場所に戻ってきて下さい。」	※表を出す 行司 (柳川) 呼子 (北嶋)
団体戦 15:40	「それでは引き続き、団体戦を行います。」 Aチーム Bチーム ※順番に行っていく（前頭→小結→関脇→大関→横綱） 「お疲れ様でした。ありがとうございました。それでは只今より、表彰式の準備がありますので休憩時間を取りたいと思います。しばらくの間、お待ち下さい。」	※表を出す ※5人づつ？ ※準備が整う直前、全体写真用に並ばせておく (皆で)
記念撮影 16:00	「それでは先に記念撮影を行いたいと思います。」 ※全体写真→ひなまつり写真	
表彰式 16:10	「お待たせいたしました、表彰式を行いたいと思います。」 「まず始めに、個人戦の部、優勝○○さん、準優勝○○さん、敢闘賞○○さん、○○さん。おめでとうございます。」 「続きまして、団体戦の部、優勝○チーム。おめでとうございます。」	賞状を渡す
メリアンダー 16:20	「それではメリアンダーにうつりたいと思います。」 ※乾杯の音頭：○○先生	※皆で準備？ ※ひなあられの準備

※「イエーイ」の部分は皆で大きな声で盛り上げること!!

MAIMAI VS OWTSARNOKASE





フィリピン大学の学生さんと記念撮影



ひな祭り杯争奪戦女性相撲



○×クイズ中

○×クイズについて

尚、優勝者の景品は、岡島さんのお姉さんから譲っていただいた、大相撲の湯のみセットと絵番付けを贈呈いたしました。

—問題—

① 力士は全員日本人である？

→× (モンゴル人やロシア人やブルガリア人などの力士も活躍しています)

② 力士は約5万人である？

→× (約2万人。日本人の約0.015%。相撲は見る競技であることが分かります)

③ 力士の平均体重は150キロ以上で、身長は180センチ以上である？

→○ (体重の重い人は183キロ、軽い人は122キロ、一番高い人は202cm、低い人は169cmなのです。)

④ 優勝すると賞金1000万円もらえる？

→○ (横綱クラスになるとこのくらいの値段かもしくはもう少し高くなります)

⑤ 力士は1日5食である？

→○ (体重を増やすために、食べた後すぐに寝るそうです)

⑥ 化粧回しの平均金額は約10万円である？

→× (平均100万円前後である。横綱クラスになると200万円程になります)

記念品

○賞状

色紙は、大相撲の力士達の絵を切って貼り付け、コメントとメンバーのサインを書いて賞状風にしました（個人戦で第3位までに入った計4人に渡しました）。



○ひなあられ（参加した学生全員に配るもの）

スーパーでひなあられを購入し前日の夜、現地のホテルで梱包作業を行いました。ひなあられを小分けにするため、小さい透明の袋を購入し、そこに桜のシールを貼って手渡しました。

○化粧まわし（大学への贈呈品）

酒屋で見つけた前掛けにフェルトを縫いつけ、デザインを施しました。また、本来ならば藁の部分がありますが、そこについては金色の太いモールを括りつけ完成させました。デザインは和風なもので日本を象徴するものということで「富士山」を描きました。



《写真上から》

- *入賞者および贈呈した色紙
- *当日優勝した現地の学生さんと化粧回し
- *フィリピン大学のご好意で豪華なメリアンダーをごちそうになりました。
- *みんなよろこんでくれてるかな？

(気遣ってくださる新見先生)→



「ハイチーズ!!」とっぴきりの笑顔で記念撮影☆



～最後に～

棕野先生のおかげで、立派な衣装やカツラ、化粧回し等が完成いたしました。本当にありがとうございました。先生の手際の良さに感動するばかりでした。

第4部

資料

Data

フィリピン共和国概要	74
発表会式次第	75
英文指導書	76
リーダースピーチ(英文&タガログ語)	77
よく使ったタガログ語集	79
活動資料	80
天理教の用語説明	84
新聞記事、寄贈品一覧	85
お礼状	87

フィリピン共和国概要 (Republic of the Philippines)

独立年月日： 1946年7月4日
首都： メトロ・マニラ
人口： 92,681,453人(2008年推計)
面積： 299,404km²
主な島： ルソン島、ヴィサヤス諸島、ミンダナオ島などをはじめ、大小合わせて7,109の島々から構成されている。
言語： 国語はフィリピノ(タガログ)語、公用語はフィリピノ語と英語であるが、母語として使われる言語は、合計172に及ぶ。第2言語として英語が使用されている。

国名・国旗の由来など

1542年に上陸したスペイン人が、スペイン皇太子フェリペ(後の国王フェリペ2世)にあやかり、「フェリペの島々」の意で、フィリピナスと命名したことによる。

1943年に国旗を制定。三角形内の太陽は自由の象徴で、8本の光は独立に立ち上がった8州を表し、3つの角にはそれぞれルソン、ビサヤ、ミンダナオの3地方を示す星を配する。青は真実・正義、赤は勇気・愛国、白は潔白・平和をそれぞれ表す。戦時の時には赤と青の配色が入れ替わる。

国銘は「神、国民、自然、国家の愛情のために」

歴史

1565年～1898年 スペイン植民地時代
1898年～1946年 米国植民地時代
この間の一時期、日本が統治
1946年 独立



宗教

フィリピン共和国はアジア唯一のキリスト教国である。スペインのが植民地統治時代にローマ・カトリックを広めた。それ以前は、各島の自然の精霊などを信じる原始的な宗教があった。現在はフィリピン人の83%の人がローマ・カトリック、9%がプロテスタントを信仰し、他にイスラム教が5%、仏教などが3%である。

社会と文化

フィリピン人は一般に親切で、恩や義理を重んじ、社交を大切にする。フィリピン文化は、その歴史を反映したいわばマラヤ、スペイン、アメリカ文化の混合ともいえるべきものであるが、最近では民族的独自性が生まれつつある。貧富の差が激しく、職を求めて都市部に流入するものが多い。

日本との関係

1976年に日比賠償が終了し、両国は新しい関係の時代に入った。経済分野では日本は、米国と並んで大きな存在となっており、人的交流も盛んである。

発表会式次第

PROGRAMME

- | | |
|--|---|
| I .Opening Prayer | Mrs.Zenaida C.De Guzman |
| II .National Anthem of Philippines | Ms.Evelyn L.Bacube |
| National Anthem of Japan | TENRI University |
| III.Opening Remarks | CONSTANCIA R.FAJARDO
Principal II |
| IV.Introduction of Students and Staff Members
(Tenri University International Participation Project 09) | |
| V .Message | NORIYA SUMIHARA, Ph.D.
Staff-Tenri University(International
Participation Project09) |
| VI.Message | Ms.Mikiko Yasuda
Student-Leader Tenri University
(International Participation Project 09) |
| VII.Mini-Concert Proper | |
| A. Playing dance of the
'SUMO DANCE' | TENRI UNIVERSITY students |
| B. Playing Recorder by the
SES Elementary pupils | All Grade IV pupils |
| C. Playing Recorder | TENRI UNIVERSITY students |
| VIII.Presentation of Recorder Playing Diploma for select GradeIV Pupils,
and Origami to all SES pupils | |
| IX.Presentation of Certificate of
Appreciation | Rev.KAZUOKI UEDA
Representative of Tenrikyo
Tohon Sta.Rosa Mission Station |
| X.Presentation of Plaque of Recognition | CONSTANCIA R.FAJARDO
Principal II |
| XI.Closing Remarks | Mr.RAMON BARTOLOME
PTA-President
Ms.Czarina B.Villacruz & Ms. Mayuko KUBO |

☆ How to teach a recorder ☆

1. Basic Point!!

- Before having the recorder = correct position
 - ① Not resting on a support for the back
 - ② Not swing legs
 - ③ Not leaning elbows on the desk
 - ④ Sitting with a straight back
- The left hand is upper and the right hand is lower.
 - ※ Notice the position of a right thumb.
 - ※ Always set a right thumb even if you don't use your right fingers.
 - ⇒ It is better for children to stick a seal on the position of a right thumb, because children can notice the position of a right thumb.
- Before playing a recorder
 - ① Putting recorder between lips (figure 1.)
 - ※ Not holding a recorder in a mouth
 - ② How to blow into a recorder
 - Basically you have to use a weak breath .
 - ※ How to weak breath looks like making sounds by a bottle.(figure 2.)
 - Figure 1. Figure 2.
 - ③ When you play a recorder you have to say “tu - tu -” .
(not “fu - fu -”)
 - This “tu - tu -” is said to “tanging”
- At last, let's play a recorder !!!!
(You always have to check your correct position before playing a recorder.)
 - ① When you start to play a recorder, you should play “♪ti - ra - so - ♪” ,because this sounds are very easy.
 - ② Pushing holes certainly
 - ③ It is very important to play a recorder softly!
 - ※ But you have to play the higher “mi fa so ra” a little strongly.

2. Practice Point !!

- When you practice songs ...
 - ① First, you have to sing the song.
 - ※ You can't play a recorder soon.
 - ② Sing scales (♪do - re - mi - fa - so - ra - ti - do ♪)
 - ③ Memorize scales
 - ④ When you can memorize scales, you play the song by a recorder!

Let's Enjoy Recorder!!

Leader speech

2月23日(月) StaRosa 市長表敬

It is very nice and honorable to meet you Mayor, Mrs. Arlene Arcillas Nazareno. We are a team from Tenri University, Japan. We will stay here until March first. Our mission here is to teach music at Sinalhan Elementary School. We would be very happy if we could be some help to the education of the children. (in English)

Ako ay si Mikiko Yasuda. Ako ay leader nang project rito. Paki sabi mo ako Micco. Bahara na po kayo sa akin. Let us introduce ourselves one by one.

2月24日(火) Flag celemony in SINALHAN Elementary School

Hello. Kumusta ka na? Masaya ako dahil nakilala ko kayo. Kami ang grupo galling Tenri University Japan. Andito kami hanggang March one. Ang misyon namin ay turuan ng musiko ang SINALHAN Elementary school. Magiging masaya kami kapag naruto kayo samin. Ako ay si MIKIKO YASUDA. Ako ang leader nang project na ito. Ang palayaw ko ay MICCO. Nagaaral ako ng Chinese language sa Tenri U, Japan. Ngayon sama sama tayo!! Magpapakilala kami sa inyo isa isa. (in Tagalog)

Let us introduce ourselves one by one.

2月27日(水) Flag celemony (コンサートメッセージ)

I am very happy to announce to you all that there is a concert of flute flute this afternoon at 3:00 O'clock right here on this ground. Everyone is welcome, so Please come to enjoy the concert!! (in English)

Ngayon araw ay may koncyrto tayo. Sa ganap na ika-3 ng hapon sa may coverd courd. Manuod kayo ng konsyerto ng flute ng mga nasa ika-4 na baiting. (in Tagalog)

2月27日(木) コンサートあいさつ

Magandang hapon po, everyone! On behalf of International Particiation Project members, I would like to express my appreciation to Sinalhan Elemntary School for giving us this opportunity to teach music. 4th grade Pupils practiced the flute, song of Leron Leron Sinta very hard, in the last 4days. So I would like to enjoy listening to their music.

2月28日(金) StaRosa 高校あいさつ

How do you do? I'm Mikiko Yasuda, thr leader of the International Particiation Project of Tenri University. We have been really looking forward to meeting you. Today, Let's enjoy playing sports and dancing together.

2月27日(木) MIRIENDA PARTY お礼のあいさつ

On behalf of our group members, I really thank you for inviting us all today to this party. We are really excited. I am sure that this party helps us better communicate with our host families.

3月1日(土) さよならパーティー (はじめのあいさつ)

Hello! On behalf of Tenri University student, I want to say thank you so much for coming to the Farewell Party today. Thank to the warm hospitality of all of our host families, as well as Rev,Ueda, Rev,Sasaki, Rev,Teiko-san. This is a very small token of our appreciation, but we cooked Japanese food this morning for you. I hope you will enjoy our food. Please remember us as we will never forget about you.

さよならパーティー (終わりのあいさつ)

I hope that you enjoyed our Japanese food. Thank to you all, this last one week was truly fruitful and memorable. We are leaving Sta,Rosa early tomorrow morning, but we hope that our relationship will never end. We always wish you all happy life.
we love you all. Thank you so much!!

3月3日(月) フィリピン大学あいさつ

Magandang hapon po, everyone.

Ako ay si Mikiko Yasuda. Ako ay leader nang project rito. Taga Tenri University ako,
We have been really looking forward to meeting you. Ngyon sama sama tayo!!
Let's introduce ourselves noe by noe.

3月3日(月) 国際交流基金あいさつ

Ako ay si MIKIKO YASUDA. Ako ay leader nang project rito.

☆よく使ったタガログ語集☆

～挨拶編～

おはよう : ^{マ ガ ン ダ ン ウ マ ー ガ ボ} magandan umaga po

こんにちは : ^{マ ガ ン ダ ン ハ ー ボ ン ボ} Magandan hapon po

こんばんわ : ^{マ ガ ン ダ ン ガ ビ ボ} Magandan gabi po

ありがとう : ^{サ ラ マ ッ ト} Salamat

ごめんください : ^{タ オ ボ} Tao po

いってきます : ^{ア リ ス ナ ア コ} Aalis na ako

バイバイ : ^{パ ア ア ラ ン} Paalam

ただいま : ^{ア ン ジ ッ ト ナ ア コ} Ang dito na ako

おいしい : ^{マ サ ラ ッ プ} masarap

私は～です : ^{ア コ アイ シ} Ako ay si ~

お会いできてうれしいです : ^{イ キ ナ ガ ー ガ ラ ッ ク コ ン マ キ ラ ー ラ カ ヨ} Ikinagagalak kong makilala kayo

また会う日まで : ^{ハ ン ガ ン サ ム リ} Hanggang sa muli

日本から来ました : ^{ク ガ ハ ボ ン ボ ア コ} Taga Hapon po ako

～リコーダー指導編～

静かに : ^{ト ム マ ヒ ミ ッ ク} Tumahimik

ゆっくり : ^{ダ ハ ン ダ ハ ン} Dahan! dahan!

いい感じ! : ^{ア ヨ ー ス} ayos

上手だね! : ^{マ ガ リ ン} Magaling

穴をふさいで : ^{タ ク バ ニ ヨ ア ン ブ ー タ ス} Takpan nyo ang butas

待って : ^{サ ン ダ リ ラ ン} Sandali lang

“～”の話を聞いて : ^{マ キ ニ ン カ ヨ カ イ} Makining kayo kay “～”

～その他～

～を買いたい : ^{グ ス ト コ ン ブ ミ リ ナ ン} Gusto kong bumili ng ~

これはいくらですか : ^{マ グ カ ー ノ イ ッ ト} magkano ito?

トライシクル : ^{ト ラ イ シ ケ ル} traysikel

止めてください : ^{パ ラ ホ} para ho

お父さん : ^{タ タ ア イ} tatay

お母さん : ^{ナ ナ ア イ} nanay

子ども : ^{マ ガ バ タ} magabata

美しい : ^{マ ガ ン ダ} maganda

トイレ : ^{シ ー ア ー ル} C R

市場 : ^{パ レ ン ケ} palengke

朝食用パン : ^{パ ン デ サ ル} pandesal

アドボ (料理の名前) : ^{ア ド ボ} adobo

バナナ : ^{サ ギ ン} sagin

ランブータン (果物の名前) : ^{ラ ン ブ ー タ ン} rambutan

おかま (フィリピンには多い!) : ^{バ ク ラ ア} bakla

ジョリビー (有名なファストフードのお店) : ^{ジ ヨ リ ビ ー} Jolibee

乾杯! (万歳) : ^{マ ブ ー ハ イ} Mabuhay!

活動資料

◆第10回「国際参加プロジェクト(フィリピン)」ユニフォーム◆



【Designed By 岡島 美佳子】

リコーダー発表会の際、
シナルハン小学校の先生
から頂いた交流記念品

◆賞状◆

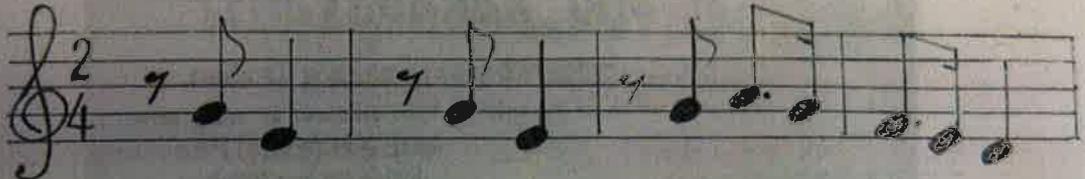


◆相撲班の色紙◆記念品として贈りました



“Hello Song” と “GoogBye Song”

 ~ Hello Song ~ 



Hello Hello Hello How are you
   (曲げる)  (前へ出す)

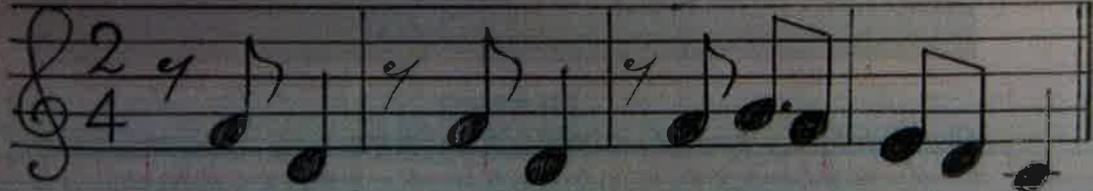


I'm fine I'm fine I'm fine thank you
   

 ~ Good Bye Song ~ 



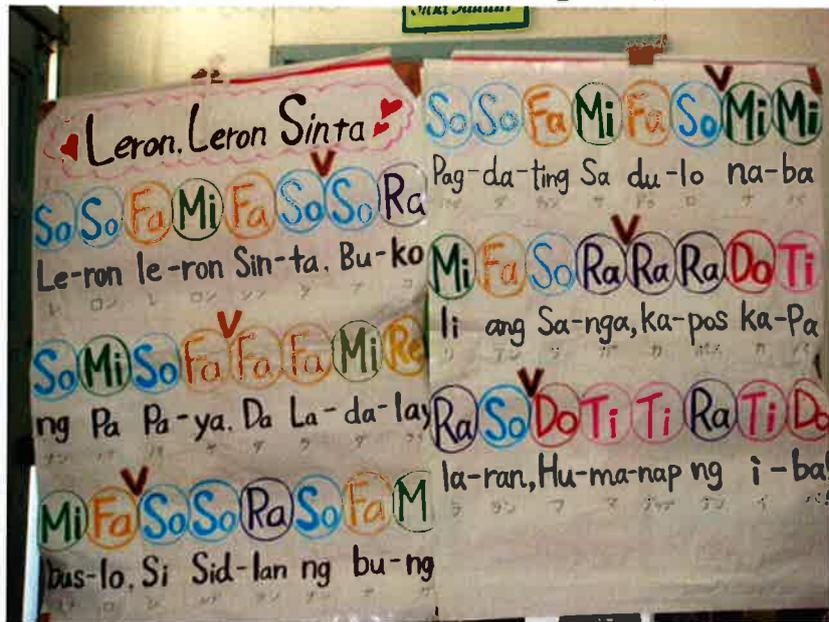
Good bye Good bye Good bye Say Good bye



Good bye Good bye See you tomorrow

子ども達と楽しい授業になるように、授業開始時と終了時に毎日元気に歌いました。

◆今年の課題曲『レロンレロンシンタ』の楽譜◆



フィリピンの子ども達はきっと音符を読むことはできないだろうと予想して、あえて楽譜は載せなかった。その代わりに歌詞とドレミを対応させて書いたことで、その歌を歌うようにドレミも覚えていくことができるよう工夫した。

◆リコーダー発表会の際、子ども達に渡した賞状◆



【日本語訳】

「あなたたちは、リコーダーの練習をよく頑張りました。もう素晴らしいリコーダー奏者の一人です。これからもリコーダーを続けてくださいね。リコーダーを通してフィリピンのあなたたちと日本の私たちの心が繋がったことでしょう。ありがとう！」

★どすこい体操★

作詞 ラッキイ池田 作曲・編曲 幾見 雅博
振付 ラッキイ池田

塩まいてパンパンパン
お尻もパンパン 顔パンパン
いち に さん し しこふんで
ドスコイ ドスコイ
軍配かえった 目を覚ませ
まったなし
よーい はっけよーい

つっぱりだ つっぱりだ
カいっばい つっぱりだ
小さい相手に つっぱりつっぱり
大きい相手に つっぱり
右に逃げたぞ つっぱりつっぱり
左に逃げたぞ つっぱり
まわしをひいたら がぶりより

外がけだ 内がけだ
のこった のこった 倒れない
外がけだ 内がけだ
バランス バランス 倒れない

「だけど おなかが減っちゃったよ
おーい ちゃんこまだー？」
「コーッ！」「ハイッ！」

塩まいて パンパンパン
お尻もパンパン 顔パンパン
いち に さん し しこふんで
ドスコイ ドスコイ
軍配かえった 目を覚ませ
まったなし
よーい はっけよーい

よーい はっけよーい
とんだ とんだ
はっそうとびだ それ ジャンプ！
お相撲さんだって それ ジャンプ！
おまけに いぞりだ
体をそらせ

したてひねりは 手を下に
うわてひねりは 手を上に
合掌ひねりだ
両手で ひねろう ギュギュギュ

猫だまし おどろかし
サルだましは キッキッキ
調子に乗って タコだまし
タコは食べちゃう
「ごっつあんです」
「コーッ！」「ハイッ！」

塩まいてパンパンパン
お尻もパンパン 顔パンパン
いち に さん し しこふんで
ドスコイ ドスコイ
軍配かえった 目を覚ませ
ドスコイ！

天理教の用語説明

このページでは、寄稿文や感想文などの中でよく使われた天理教用語を簡単に説明しています。天理大学には天理教信者でない学生も多く、この文集を読むときの手助けになればと思います。『天理教用語の基礎知識』（天理教道友社）2008年から引用しました。

「親神様」（おやがみさま）

神名を天理王命（てんりおうのみこと）という。教祖は親神様のことを人々によく分からせるため、「神」「月日」「を（お）や」と、三つの段階を踏まえて教えられた。まず、人間を含めこの世すべてを創造された「元の神」であり、創造以来変わることなく守護されている「実の神」であると。次に、一刻の休みもなくすべてのものに光と恵みを与える「月日」こそ、天における親神様の姿であると。さらに、もっと身近な、何事でも打ち明けてすぐることのできる「親」であると。

「教祖」（おやさま）

天理教の教祖中山みき様のこと。「おやさま」とお呼びしている。

「ちば」

教会本部神殿の中央、「かんろだい」と呼ばれる台の据えられている地点。親神様が人間・世界を創造される時、最初に人間を宿し込まれたところで、ここに親神様がお鎮まりになっている。「ちば」は、すべての人間のふるさとであるので、ここに参ることを「ちばに帰る」、「おちば帰り」という。周辺を「親里」と呼んでいる。

「陽気ぐらし」（ようきぐらし）

心の底からわき出る陽気につつまれた明るい暮らし。天理教信仰者の目標とする暮らしであり、親神様が人間を創造された目的でもある。

「かしもの・かりもの」

私たちの、からだは自分の思うとおりに動くものだと思っています。しかし、私たちがからだを自由に使うことができるのも、親神様が体内に入り込んで、限りないご守護を下されているからです。たとえば、朝、目が覚めるのも、食べたものが血や肉になるのも、呼吸ひとつにしても、自分で意識してやっているにはありません。病気になって、熱が一、二度上がっただけで、自由に動かせるはずのからだもままならなくなります。このことを「身はかしもの・かりもの」と教えられます。からだは、親神様からにげんへの「貸しもの」、人間の側から言えば「借りもの」だということです。親神様は、からだは人間に貸しておられますが、心だけは「わがもの」として、自由に使うことを許されました。だから、目、耳、鼻、口、両手、両足、生殖器官、これら九つの道具は、自分の心で思うとおりに使うこともできるのです。自分の思いどおりに使えるといっても、借りたものであるからには、貸し主の思いに添って使うことが大切です。その思いとは「陽気ぐらし」。

「ひのきしん」

漢字を当てれば「日の寄進」。寄進とは、もともと寺社などに財物を寄付することですか、教祖（おやさま）は、誰でも日々できる親神様（おやがみさま）にささげる行いとして、「ひのきしん」を教えられました。無償の行為ということでは、ボランティアと同じですが、親神様のご守護があるからこそ、からだを動かすことができるのだという、喜び勇んだ心が込められています。この感謝の心から生まれる行動は、すべて、「ひのきしん」です。姿形ではなく、そこに込められた心が大切なのです。

「にをいがけ」（にいがけ）

親神様の思いをまだ知らない人に伝え信仰の道にいざなうことです。信仰の喜びから発散する匂いをかける意味です。

「おさづけ」

病だすけの手段として渡される授けのもの。「おさづけの理」を頂いたものが、病で苦しんでいる人に真実の心を込めてこの理を取り次げば、心次第でどんな悩みも取り除いていただけるということです。

「おたすけ」

病気や事情で苦しんでいる人に、おさづけを取り次いだり、話を取り次いで、たすかる方向へ導くことです。

「おつとめ」

教祖が、世界中の人間をたすける方法として教えられた、天理教独自の祭儀。本づとめは「かぐらづとめ」と「てをどり」からなる。かぐらづとめは「ちば」でしかつとめられない。

「お願いづとめ」

病気や事情のご守護を願ってつとめるおつとめ。

「朝づとめ・夕づとめ」

朝には、新しい一日を迎えさせていただいたお礼と、今日一日の無事をお願いし、夕には、一日を結構にお連れ通りいただいたお礼と、明日への祈りをこめてつとめるおつとめ。教会本部はもちろん、教会や布教所、神様をまつる信者家庭でもつとめられる。

新聞記事など

天理大学地域文化研究センター ソプラノリコーダーか折り紙の寄付を募集!

INTERNET ROOM
天理大学地域文化研究センター
広告

天理大学地域文化研究センターでは、2月20日(土)と3月4日(水)の日曜日の両日とも国際参加プロジェクトを実施予定です。同プロジェクトではフィリピンの小学校で児童を対象にソプラノリコーダーと折り紙の提供を行います。そのほか家庭で遊んでみるまたは不要になったソプラノリコーダーか折り紙がございましたら同プロジェクトのために提供いただけます。ご協力をお願いいたします。

現地での施設などの関係で実施できない音楽教室などに活用させていただきます。

※ソプラノリコーダーか折り紙以外は受け付けておりませんのでご了承ください。

○募集の期 2月10日(火)必着

○提供の品 天理大学地域文化研究センターに新着品として届けていただく場合は送料をいただいた上でお願いします。

○送料先 天理大学地域文化研究センター
 INTERNET ROOM
 天理大学地域文化研究センター
 担当 湯田
 TEL:074-36-36047

2009年2月7日 産経新聞 夕刊

国際支援の「子ども」学ぶ

フィリピンで文化交流体験

天理大

第10回 国際参加プロジェクト

天理大学地域文化研究センターは、2月20日(土)と3月4日(水)の日曜日の両日とも国際参加プロジェクトを実施予定です。同プロジェクトではフィリピンの小学校で児童を対象にソプラノリコーダーと折り紙の提供を行います。そのほか家庭で遊んでみるまたは不要になったソプラノリコーダーか折り紙がございましたら同プロジェクトのために提供いただけます。ご協力をお願いいたします。

現地での施設などの関係で実施できない音楽教室などに活用させていただきます。

※ソプラノリコーダーか折り紙以外は受け付けておりませんのでご了承ください。

○募集の期 2月10日(火)必着

○提供の品 天理大学地域文化研究センターに新着品として届けていただく場合は送料をいただいた上でお願いします。

○送料先 天理大学地域文化研究センター
 INTERNET ROOM
 天理大学地域文化研究センター
 担当 湯田
 TEL:074-36-36047

異文化を心で受け入れ

天理大学地域文化研究センターは、2月20日(土)と3月4日(水)の日曜日の両日とも国際参加プロジェクトを実施予定です。同プロジェクトではフィリピンの小学校で児童を対象にソプラノリコーダーと折り紙の提供を行います。そのほか家庭で遊んでみるまたは不要になったソプラノリコーダーか折り紙がございましたら同プロジェクトのために提供いただけます。ご協力をお願いいたします。

現地での施設などの関係で実施できない音楽教室などに活用させていただきます。

※ソプラノリコーダーか折り紙以外は受け付けておりませんのでご了承ください。

○募集の期 2月10日(火)必着

○提供の品 天理大学地域文化研究センターに新着品として届けていただく場合は送料をいただいた上でお願いします。

○送料先 天理大学地域文化研究センター
 INTERNET ROOM
 天理大学地域文化研究センター
 担当 湯田
 TEL:074-36-36047

2009年3月22日 天理時報



ひな祭りの三頁、フィリピン大ディリマン校(首都)

「女相撲」で比日交流

ひな祭りに学生ら約50人

個人戦決勝で、対戦相手の比大学生を下手投げで攻めるガブドさん(左) = 3日午後3時半ごろ比大ディリマン校で写す

「女相撲」は、天理大学の女子大生約四十人と天理大国際文化学部(奈良県天理市)の学生ら日本人女性八人が相撲を海して交流した。「女相撲ひな祭り杯」フィリピン場所」と称した団体戦では、比日の十四人が二チームに分かれて対戦。校舎の床に紙テープを張った土俵(直径五・五メートル)上で熱戦を繰り広げた。続く個人戦には、比大から八人、天理大から二人がそれぞれ出場した。優勝者は体重四十二キロのオウツア・ガブドさん(19)で、比大首脳学部長、テコンドーで鍛えた足腰を生かし、体格で上回る他選手を次々に倒した。

立ち合いや離れ、まげ振りなどの難し手は、天理大の学生らが実演を交えて教授した。対戦が始まると、立ち合いで顔を見合わせ、「ハイ」と笑顔で声を掛けてから組み合う比大生もいた。

表彰式では、天理大学生の手作りの「おひな様」と三人宮女の衣装とカツラや富士山を描いた化粧まわしなどが個人戦優勝のガブドさんらに贈られた。天理大の学生らは三月二十一日、二〇一〇年から続く国際協力実習の一環として来比。三月一日までは、ラグナ州サンタロサ市の比人家庭にホームステイしながら、小学生約二百五十人と比大学生との「相撲交流」は、国際交流基金マニラ日本文化センターの協力で実現した。

2009年3月4日 まにら新聞

寄贈品一覧

◆寄贈の様子◆ ひとつひとつを手渡しで贈ることができました。



小学校への寄贈物品

- ソプラノリコーダー ……208本
- リコーダー指導冊子 ……15部
- おりがみ ……多数
- クレヨン(袋詰め) ……約200袋
- 交流班で使った物品各種

お礼状

フィリピンで活動するに当たり、全国からリコーダーを多くの皆様からいただきました。ご協力いただいた方々へ、活動中のフィリピンからお礼状をお送りしました。皆様本当にありがとうございました。



この度は、たくさんのリコーダー・折り紙を寄付していただき本当にありがとうございました。皆さんからいただいたものを使って、多くの子どもたちに喜んでもらえるようにがんばっています。本当にありがとうございました。



2009年 天理大学
「国際プロジェクト」
参加メンバー一同

第10回 国際参加プロジェクト(フィリピン) 2009

この度は、リコーダー・折り紙を寄付していただきありがとうございました。私たちはいま、皆さんの暖かい思いを胸にフィリピンで活動をしています。皆様からいただいたリコーダーがここフィリピンの子どもたちのもとで鳴り響いています♪ 本当にありがとうございました。
Salamat po!! ありがとうございました。



編集後記

この報告書を完成するのに、とても時間がかかりました。みんなで協力して作ることができ、参加者全員の思いがこもったすばらしい文集に仕上がったと思います。

参加者の中で、現在学生の者は2人しか残っておらず、作業を進めていく面ですんどいこともたくさんありました。初めはパソコンの使い方もあまりわからなかったのもので、使い方や操作に慣れるのに時間もかかりました。作業の途中でこの研修の写真を見たときに、現地での楽しかったことが思い出されて、写真を見て笑っていたりもしました。しかし、作業を進めていくなかで学べたことは大きかったと思います。

第10回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」は、多くの人の支えがあったからこそ終わることが出来たと思っています。この文集を読んで頂きありがとうございました。

参加者一同



天理大学 国際参加プロジェクト参加メンバー一同

632-8610 奈良県天理市杣ノ内町1060 天理大学地域文化研究センター
Tel/Fax 0743-63-7077
E-mail icrs@sta.tenri-u.ac.jp



PHILIPY '09

第10回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」報告書

発行	2010年3月4日
監修・編集	柳川 賀津子、椋野 和子、澤山 利広
編集	貝増 舞、岡島 美佳子、北嶋 美根子、久保 真百子 安田 美貴子、奥 きよか、椋野 まゆみ、椋野 美和
発行所	天理大学地域文化研究センター (ICRS) 〒632-8510 奈良県天理市柚之内町 1050 Tel/Fax 0743(63)9007 e-mail : icrs@sta.tenri-u.ac.jp